
魔法少女リリカルなのは～運命を変えし転生者～

ロキ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは～運命を変えし転生者～

【NZコード】

N4122X

【作者名】

ロキ

【あらすじ】

ある一人の青年が自分の命と引き換えに一人の少女の命を救つた。偶然現世を観察していた女神は人一人の運命を変えた青年の行為に感心し、青年に第二の人生を生きるチャンスを与えた。青年は女神から力と一人のパートナーを得て新たな世界を生きることになった。転生した世界は魔法少女の世界だった。その世界の原作を知る青年は女神からもらった力を使い一人のパートナーと共に少女たちを悲しみの運命から救うことを決意する。

魔法少女リリカルなのは～運命を変えし転生者～ 始まります。

プロローグ（前書き）

初めまして口キです。これまでたくさんの一二次小説を見て僕も書きたくなり今回初投稿しました。

何分小説初心者ですので駄文になるかもしれませんが僕なりに精一杯やつていこうと思います。

もし興味のわいた方は読んでみてください。楽しんでいただけるようがんばります。
ではどうぞ。

プロローグ

「ふあ～ あああ

よく晴れた空、それはもう晴れすぎではないかといつぐらりに青く澄み渡った快晴の休日、俺はあくびをしながらあてどなく街を歩いていた。

せつからくの休日に家の中でじろじろしているのももつたいたいと思ひ外に出てきたのはいいが特に行きたいところがあるわけでもなくぶらぶらしているのも結構暇なものだ。

「さあ～ でどうするかなあ。映画でも見に行こうかな。今つてなんかおもしろい映画とかやつてたかな？」

俺は映画館のまつに向かって歩き出しだが、そこでふと足を止めた。

「ん？」

視界の端に転がったボールを追いかける女の子が見えた。女の子はようやく止まつたボールを拾い上げた。しかしそこに車が走ってきた。

「んなつーー？」

俺は目を見開いた。

「くわーーー！」

気がついた時には女の子のほうに走っていた。このときは自分で驚くぐらいのスピードが出ていたと思う。

「ノルマを守らねば……」

俺は勢いを殺さずにそのまま女の子を抱きかかえた。それと同時に背中に凄まじい衝撃が襲いかかり俺は女の子を抱いたまま衝撃に従つて道路を三、四回ほど転がつた。ようやく止まると全身にとつもない激痛がはつた。そんな激痛のなか俺は腕の中の女の子を見た。どうやら怪我らしい怪我はしていないようだ。

（ああ・・・大丈・・・夫・・・そうだ。よか・・・つた）

そう思つたのを最後に俺の意識は闇に落ちた。

プロローグ（後書き）

と、まあこんな感じです。いかがでしたでしょうか？
この連休は投稿できると思います。それではまたお会いしましょ
う。

第一話 女神との邂逅（前書き）

遅くなつてしまい大変申し訳ありません。

このような作者ですがどうか最後までお付き合いでお願いします。

それでは第一話始まります。

第一話 女神との邂逅

Side? ? ?

俺はいったい、どうなったのだろう。

わからない。なにも思に出せない。

「……」なのだろう? なんだかすこしく心地良い感じがある。まるで宙にふわふわと浮いているようなそんな感じが。

ああ、できるならずっとここにいたい。なにも考えずこの心地良さに甘えていたい。

「……」

ん? いま何か聞こえたような……?

気のせい?

「……ねえ……ねえ……ああ」

あ、また聞こえた。いつもやうやくのせにじやないみたいだ。

「ねえ……おきて」

誰かが俺を呼んでる? でも誰が?

「ねえ、おきてつたら~」

あ、今度ははつきりときこえる。誰だらつ・すゞしへきれいな声だけど。

「ねえ～、ちょっと、せりえてる～？」

ああ、やつぱりすゞ〜！「あれにな声だな。」こんな声に呼ばれるのもなんだかわるくないな。

「お~い、もしも~し?」

いつたい誰が呼んでいるのだろう？俺はつづらと田を開けようとしたとき。

「おひねあおあひーーー?」

いきなり耳のすぐ近くで呼ばれて俺は飛び起きました。

「なつ、なんだ!? だれだ!?」

俺は慌ててあたりを見回した。

「あ～、せりとおあた～。も～う、君こくらなんでも廻過だよ～。」

俺は声のすむ所を向くとおもわず田を見開いた。

「でも、すげえ気持ちよさそうな顔して寝てたね」。フフフ。とり

あべす、おせよいかな？」

そこにはかるいウーハーのかかる長い金色の髪にサファイアの
よつに透き通つた青い瞳をして神話なんかに出てくる神様なんかが
着るような白い服を着て背中に大きな鳥のよつな純白の翼を生やし
たとても綺麗な女の人人がいたからだ。

「あ、あの・・・あなたはいつたい・・・？」

俺はその女性に面食らいながらもなんとか質問をした。するとそ
の女性はキヨトンとした顔をした。

「？・・・あつ、そつかまだ自己紹介してなかつたね。
ごめん！」めん

苦笑しながら謝る女性。

「えーっと、それであなたは？」

俺はもう一度質問をする。

「んんひ。それじゃあまずは自己紹介を。初めまして勇氣ある人間
君。私の名前はルティア、女神ルティアよ。よろしくね」

彼女は輝くばかりの笑顔でそう言った。

第一話 女神との邂逅（後書き）

かなりの間が空いてしまって申し訳ありません。

当分はもしかしたらこんな感じでやつてこくことになるかもせれません。

このような駄目作者で恥じ入るばかりですが、自分なりに精一杯頑張つてこいつと思つてよろしくお願ひします。

第一話 とりあえず現状確認（前書き）

口キです。休日なので連日投稿してみよつと想つて書きました。
女神と出合つた主人公。はたして彼の運命はどう向かうのか?
それでは第一話始まります。

第一話 とりあえず現状確認

Side????

「…………は？」

俺はそんな間の抜けた声を出してしまった。しかしそれも無理はないと思う。俺の耳がおかしくなれば、今この女性は自分を女神だといった。普通に考えればこの女性には今すぐ精神科に行くことをお勧めするのだが、彼女の恰好や何より背中の羽は幻覚でもない限り間違いなく彼女の背中から生えているように見える。つまりこの人？は本当に・・・・・

「ええ、本当に、正真正銘、間違いなく、本物の女神よ」

「そりや読めるわよ。だつて女神だし」

「そりや読めるわよ。だつて女神だし」

「また読まれた！？」

「じ、じゃああなたは本当に・・・・・・女神さま？」

「だから、そりゃてるでしょ！。この背中の翼が見えないの？」

そう言つて彼女は背中の翼を指差した。

「ああ、はい。大丈夫です。見えてます」

俺はとつあずかひつぱりおぐ。

「うふ。 よひじこ」

彼女は満足げに頷く。

「あの～、といひで・・・・」

俺は体を起こした状態のまま田の前に立つ女性を見上げた。

「うふ？」

「あなたが女神様といひのは、まあ忠誠譲つて認めます。で、それはいとして此処はいつたこぢいなんですか？ で、うして俺はこんなところにこるんですか？」

俺はまづこちばん気になつてこるじきを聞いてみた。

「へん、まあちやんと説明するけど、そのまえにい聞いてもいい？」

「はー？」

「きみ、自分がどうなつたのか憶えてない？」

「え？」

俺は女神（たしかルテイアといひ前だつた）ルテイアさんの質問を聞いて言葉に詰まつた。

（俺がどうなったか？あれそりいえば俺はなにか忘れているような。なんだ？俺はなにを忘れているんだ？）

俺は頭を抱えて必死に記憶を甦らせようとしました。すると俺の脳裏にズキッという痛みとともに一つのヴィジョンが浮かんだ。自分の腕に抱かれる小さな少女、自分と少女に迫りくる車、それらを思い出した俺は

（ああ…………。ううか。俺は…………。）

「俺は…………死んだんですね？」

つぶやくと、

「…………ええ。ううよ」

ルティアさんは複雑そうな表情で答えた。

「そうですか。…………あのルティアさん？」

「ん？…………なに？」

「あの子は…………俺がかばった女の子はどうなりましたか？」

俺がそう聞くとルティアさんは少し驚いたような表情のあと笑顔で答えた。

「大丈夫。あの子は無事よ。あなたのおかげでかすり傷ひとつないわ」

「 そつですか。 · · · · · よかつた

俺は心底から安心する。そつか · · · · · あの子は無事か · · · · ·

「 あなたは · · · · · 変わった人間ね」

ふとルティアさんが言つてきた。

「 え?」

「 だつて、自分が死んだことよりも他人の心配をするんだもの

ルティアさんの言葉に俺は苦笑する。

「 ああ · · · · · まあ、そつですね。でも俺の命ひとつで誰かの命を
護れたなら俺はそれで満足です。 · · · · · ま、血口満足ですけど
ね · · · · ·

俺の言葉を聞いたルティアさんは

「 · · · · · あなたは」

「 ?」

「 · · · · · 良い人間なのね」

優しい笑顔でそつ言つた。

「 · · · · · ! ! ?」

その言葉に俺は自分の頬が熱くなるのを感じた。自分の赤面した顔を見せたくないで顔をそらす。こういふことを面と向かって言われるのはやはり恥ずかしいものである。

「うん。 よし決めたわ！！」

ルティアさんは突然嬉しそうにいった。

「へ？」

俺はいきなりのルティアさんの声に驚いた。するとルティアさんは俺に満面の笑顔で言つてきた。

「ねえ、あなた・・・・転生つて興味ない？」

第一話 ひとりあえず現状確認（後書き）

今日ははとじあえず111までとします。

次回は主人公が女神から力を渡されます。楽しみにしていてください。

ではまた次回お会いしましょう。

最後に感想を送ってくれた魁斗さん。ありがとうございました。
お互いに頑張っていきましょう。他のみなさまもこれからできれば
どうか応援してください。感想などがあつたらどんどん送ってきて
ください。いつでも大歓迎です。それではまた。

第三話 俺の性分（前書き）

こんなにひね口キです。つい調子にのってまたも連続投稿していました。

少し調子にのつすぎとこづくらもしますが。

まあ、暖かい田で見てやつてください。

では第三話始まります。

第三話 僕の性分

Side? ? ?

「…………え？ 転生…………ですか？」

俺はルティアさんの唐突な質問に困惑してしまう。それはさうだ
から。いきなり転生といわれてもびっくりしたえれば、まーこのやう。

「あの～～～ルティアさん」

「ん？」

「転生って、あの転生ですか？前世の記憶をもつたまま生まれ変わ
るっていづ」

俺はそんな質問をルティアさんにしてみた。

「ええ、そうよ。その転生」

ルティアさんは変わらず笑顔で答えた。

「でも、じつして俺を？」

俺が聞くとルティアさんは俺と田線を合わせむけに座った。

「ん～、まあぶつちやけると私があなたのことを気に入っちゃった
てこいつのが主な理由なのよ」

「ルテイアさんが俺を気に入つた？」

鸚鵡返しに言ひ。

「そう。だつてあなた今時の人間しては珍しいんだもの。今の時代に自分の身を投げ打つてでも他人を助けようとする人なんて中々いないわよ」

「ああ、まあそつかもしれませんね。でもこれが俺の性分つてやつなんですよ」

そう俺は物心ついたときからこんな感じだつた。目の前で誰かが泣いていればどうしても見過ごすことができなかつた。迷子の子供を見かけたら一緒に親を探してあげたり、不良に絡まれてる人を見たらすぐさま助けに入つたり、本当になんだかい目にあつてもこの性格は直らなかつた。でもそれでもいいかと思う自分もいた。やつぱり俺は人の泣いてる顔よりも笑つてる顔のほうが好きだから。

「・・・・・そつ」

ルテイアさんがまた優しい表情で見つめてくる。あれ？もしかしてまた心を読まれた？うわ～恥ずかしい～

「んんつ、そ、それで転生の話ですけど」

俺は軽く咳払いをして話をもとに戻そつとした。

「ああ、そだつたわね。で、どうする？」

「そりやあ、確かにちよつと興味はありますけど」

確かに第一の人生を『えてくれる』といふのは是非ともお願ひしたいところだ。

「ちなみに行き先の世界は『ひつじで決める』ことになるからね

「え？ 僕に選択権なしですか？」

「ええ。 こればっかりは決まつてることだから。 『めんなさいね』トルティアさんは申し訳なさそうな顔をする。 そんな顔をされては文句も出ない。

「わかりました。 で、 どうやって決めるんですか？」

「ああ、 それはね、 これを使つの」

そう言つとトルティアさんは『ひつじからか丸い穴の開いた四角い箱を取り出した。

「あの、 それは？」

俺は箱を指して聞いた。

「『』の箱の中には色々な並行世界の紙が入つてているの」

「並行世界つて、 パラレルワールドのことですか？」

「そうよ。 ただ普通の世界とも違つ・・・例えばそうねあなたの世界にあるマンガやアニメに酷似した世界とかね

「

「へえ～、すごいですね」

俺は率直な感想を口にした。

「それじゃあ、さっそく決めちゃいましょうか？」

「あ、はい。お願ひします」

俺が答えるとルティアさんは手を箱の中に入れた。俺はどんな世界になるのだろうと内心ワクワクしていた。それはそうだろう俺の世界にあるマンガやアニメの世界に行けると言られてワクワクするなどいうほうが無理がある。自慢ではないが俺はこれでも生前かなりのマンガやアニメを見ていたのでその方面的知識にはけつこう自信があつたりする。

「んーっと・・・・・それっ

ルティアさんは箱から一枚の紙切れを取り出して見た。

「えーっと、なにに、ふんふん、なるほど。あなたの転生先が決
ましたわよ」

「どこですか？」

俺が聞くとルティアさんはこつこつと笑つて

「あなたの転生先は・・・リリカルなのはの世界よ」

そう答えた。

第三話 俺の性分（後書き）

申し訳ありません。力を与えられるところまで書きたかったのですが、書いているうちにこうなつてしましました。中々上手くいかないものですね。次回こそは主人公の能力が決まります。お楽しみに。

感想、意見等お待ちしております。ではまた次回。

第四話 与えられし力 そして旅立ち（前書き）

・・・・・なんというかその・・・・・やつぱり調子に乗りすぎですね、これ。でもどうしても、書きたいって衝動が抑えられなくて書いちやいました。

一日のうちに三話連続つて・・・まあ、他にもやつてる人はやつてますよね？

転生先も決まりいよいよ主人公が力を渡されます。

それでは第四話始まります。

第四話 『えられし力 そして旅立ち

S i d e ? ? ?

「リリカルなのはの世界って……マジですか？」

俺はおもわず聞いてしまった。

「ええ、マジよ。あら、もしかしてこの作品知ってるの？」

「あーはい。ていうか俺の好きなアニメの上位ランクに入ってるし」

そう。何を隠そう魔法少女リリカルなのはシリーズは俺が生前嵌つていたアニメのひとつなのである。まさかその世界にいけるなんて。ああ、やばい興奮しすぎて心臓がバクバクしてる。

「へえ、そうだったんだ。運がいいわねあなた」

死んでしまったこの状況で運がいいと言われてもなんか複雑である。

「それじゃあ次に、あなたに力をあげなきゃ」

「へ? 力? なんの?」

「もちろん、その世界で生きていくための力よ

。ルティアさんの言葉に俺ははつとする。これはもしかしたら……

「それでどんな力が『あの、ルティアさん』・・?なに?」

俺はルティアさんの言葉を遮り聞きたいことを聞く。

「その世界で原作を変える」としてできますか?」

これが俺の聞きたいことだつた。初めてリリカルなのはの作品を見たときからずっと思つていたことだつた。もし俺に力があつてこの世界に行けたなら彼女たちの悲しい運命を変えたいと。なのはは幼少時代に孤独を味わいそれが原因で無茶をして墮ち、一度は魔導師を断念しかけた。フェイトは大切な母親と分かり合えぬまま母と姉を失うこととなり、はやては共に生きられるはずだつたりインフォースと永遠の離別による苦しみを味わつた。

たしかにそれを乗り越えていつたからこそ彼女たちはあそこまで強くなることができたのだらう。しかし彼女たちのあの小さな肩にあれほどの苦しみを背負わせるというのはどうしても俺には納得ができなかつた。あんなものわずか九歳の女の子に背負わせていいものじやない。救いたいと思つた。護りたいと思つた。例えそれが偽善でも、エゴでも、自己満足でも、それでもいい。彼女たちが笑顔でいてくれるのなら。

「あなたは、変えたいのね。彼女たちの・・・運命を」

ルティアさんは真剣な表情で言つてきた。

「・・・・・はい」

俺はそれに同じく真剣な表情で答える

「やつぱり……あなたは優しい人なのね」

「そう……なんでしょうか?」

「ええ。 それもとびつきりの……ね」

その時のルティアさんの笑顔はまさに聖母のように慈愛に満ちていた。

「さつきの質問の答えだけど、大丈夫よ。さつきも言つたけどその世界はアニメの世界そのものってわけじゃなく、そのアニメに限りなく酷似した並行世界だから。だからどんなふうに原作を壊していくても問題ないわよ。すきなだけ暴れちゃつても」

と今度はルティアさんはいたずらっぽく笑つ。

「わかりました。ありがとうございます」

俺はとりあえず安心する。

「で……あなたにあげる力なんだけど」

「はい?」

「こんなのはどうかしら?」

ルティアさんは俺に近づいて耳打ちをする。

「いしょいしょ」

「…………え！？ いいんですかそんなの！？」

俺はルティアさんの提案した能力に驚いてしまう。またしかにその能力なら問題なく原作ブレイクもできるだらうが。

「いいのよ。いつたでしょあなたのこと気に入ったって」

彼女の屈託のない笑顔におもわずじつぢまで顔が緩む。

「わかりました。じゃ あお言葉に甘えてその力でお願いします」

「ええ！ まかせてちょうどい……」

そういうてルティアさんは俺に向かって両手をかざす。するとルティアさんの両手から光が溢れてきてその光は俺の体の中に吸い込まれるように入っていった。

「うん、これでいいわ」

「え、もう終わりですか？」

なんだかずいぶんあつたりしてくるな。まあいいけど

「あ、それからあなたの前の名前はもつ使えないから新しい名前が必要よ」

「あたらじい名前ですか？ そりですね」

俺はじばりく考えこむ。

「～～～ん・・・・・・・・・・よし、これにしてやつ」

「なんて名前にしたの？」

「燎、俺の新しい名前は神羅 燎だ」

「ちょっと中一病くわこかなとは思つたけどまあいいだろ。」

「燎・・・良こ名前ね」

「あ、ありがと! やれこめす」

笑顔で言われてつい赤面する俺。

「じゃあ、準備もできた」とだし、そろそろ行へ?..」

「ああ、はい。お願いします」

俺は何故か背筋をのばして返事をする。

「ああ、やうやつ。最後にもう一つだけ言つておかなこと」

「? なんですか?」

「あなたが世界に転生する影響でその世界になにかしらのイレギュラーがある可能性があるの」

「イレギュラーですか? それはどんな

「『めんなさい。それは私にもわからないの。でもくれぐれも注意してね』

心配そうなルティアさんに俺は笑って言った。

「大丈夫ですよ。俺にはルティアさんからもらった力がありますから」

「燎……」

「それじゃあ、いってきます。色々とありがとうございました」

「クスッ、ええ。いってらっしゃい。あなたみたいな優しい人にあって嬉しかったわ」

ルティアさんの笑顔に見送られ俺は光に包まれた。

こうして俺の異世界での第一の人生が幕を開けた。

第四話 与えられし力 そして旅立ち（後書き）

ついに転生です。ここまでけついつ長くなってしまい申し訳ありませんでした。

主人公の能力についてですが、ネタバレとして主人公紹介のプロフィールにて明かそうと思います。楽しみにしていただいた方々、すみませんでした。

それではまた次回お会いしましょう。

第五話 到着 魔法世界（前書き）

どうもロキです。

少し間が空いてしまいましたが投稿できました。

やはり実際に小説を書いてみるとその難しさがよくわかります。

しかしこれも小説製作の醍醐味といつものでしょつか。

では第五話始まります。

Side 燐

暖かい日差しを感じて俺は目を開ける。

「うん……」はは？ ああ、そうか転生したんだったな

俺は体を起こして立ち上がった。どうやらここは森の中みたいだが俺はリリカルなのはの世界のどこに転生したんだ。

（ああ、こんなことなら場所を決めておけばよかつたな……ま、しかたないか）

思わず愚痴をこぼしたが過ぎたことと思ひて気を取り直すことにした。

「さて、まずはここがどこなのか確認しないとな。……にしてもなんか視線が低いよくな……！」

俺は自分の手を見て目を疑つた。

「な、なんだ？ ……これ？」

その手はどうみても大人の手ではなく五、六歳ぐらいの子供の手だった。

「どうなつてんだ？ ……ん？」

俺は半ズボンの右のポケットになにか入っているのを感じて手を入れてみた。ちなみに今の俺の服装は俺が前の世界で着ていた半袖のシャツを今の俺のサイズに縮めてジーパンを半ズボンにしたのだ。

「これは・・・紙・・・？」

その紙には綺麗な字が書かれていた。

「ルティアさんからのメッセージ・・・か？」

俺は紙に書かれた字を読んだ。そこにはいつも書かれていた。

『燎へ、これを読んでいるということは無事に転生できたということね。何よりだわ。

これを入れたのはあなたに言い忘れたことと私がここに4つサビスがあることを伝えるためです。

まず、いまのあなたの体はちょうど五歳くらいの体になっていること、つぎにあなたを海鳴市から少し離れた森のところにあなたを転生させたこと、それと能力を使って鏡を作つて自分の顔を見てください。きっと驚くと思います』

顔・・・？顔がどうかしたのだろうか？とりあえず俺は書かれているとおりに能力で鏡を作つて自分の顔を映した。

「！？・・・な、ななな・・・」

俺はまたしても自分の目を疑つてしまつた。

「なんじゃー」りやああああああああああーーーー?「..」

絶叫する俺、しかしそれも当然だ。鏡に映った俺の顔はどこからどう見ても俺の前の世界で大人気のライトノベル、灼眼のシャナのシャナの顔になっていたのだから。・・・・・髪こんなに伸びてたのか、どうりで頭が重いと・・・・・じゃなくて！！

「せり、も、おわか・・・・・」

バツ！

俺は慌てて自分の股間に手をあててみた。

「はあ、よ、よかつた。ちゃんとある」

俺は安堵のため息を吐いた。確かに男の証しの感触がしたからだ。

性転換の可能性がないことを確認した俺は手紙の続きを読むことにした。

『ちなみにどうしてその姿にしたかというと私があの作品を好きだから それに最近じゃそういう女の子みたいな男の子が流行つてゐつてきいて、ついやつちやつた・・・てへつ』

ルテイアさん・・・Orz

というかそんな理由で勝手に他人の外見を変えないでほしい。

気を取り直して続きを読む。

『それで次にサービスの件だけど流石にあなた一人じゃ色々と大変だろうと思つてあなたにパートナーを送つておいたわ。天道宮にいると思うから後で会いに行つてあげて。ちなみに天道宮のほうもサービスだから。修行場にするなりなんなり好きに使って。多分今海鳴市の海上に浮いてると思うわ。行きたいときは【開け、天道宮の扉】で行けるようになつてるから。あ、もちろんそれとは別にあなたとパートナーの住む家もちゃんと海鳴市に用意してあるから安心して。あと今の時期は無印が始まる四年くらい前だから今のうちになのはちゃんと会つておいたほうが良いと思うわ。それじゃ第一の人生思う存分楽しんでね』 女神ルティアより

ルティアさんいくらなんでもちょっとサービスのしそぎじゃないか。つていうか天道宮つてあれ管理局からみたら完全にロストロギアだよな？・・・大丈夫か？それにパートナーか・・・どんなやつなんだろ？

「まあとにかく、まずは天道宮に行つて俺のパートナーとやらに会いに行くとするか」

そういうつて俺は天道宮に行くためのキーワードを唱えようとする。つーかこれ某妖精の尻尾の星靈魔導師のお嬢様の呪文と同じだよな？俺達の世界のマンガやアニメつて神様の世界でも人気があんのかな？

「ま、それはともかく行くか。【開け、天道宮の扉】」

俺がキーワードを唱えると地面に灼眼のシャナの自在式のような紋章が浮かび上がりその紋章から光があふれ俺は一瞬のうちに転移した。

第六話 合流 二人のパートナー（前書き）

どうもロキです。やっと更新できます。小説を書く時間というのはそれそうでとれないものだと、最近思います。

まあ、それはさておき

無事転生した燎。女神ルティアから送られてきた彼のパートナーとは？

彼のデバイスも登場します。

では、第六話始まります。

第六話 合流 二人のパートナー

Side 燐

ルティアさんからの手紙を読んで俺はパートナーに会うために天道宮にやつてきた。転移が終わつたのを感じて目を開けてみるとそこには周り一面を湖に囲まれた古めかしくも莊厳な西洋風の城であった。

「ijiが……天道宮……か」

・ 天道宮：灼眼のシャナに登場する宝具の一つ、その全体を泡のような異界秘匿^{クヨウヒツ}の聖室により覆い隠し、内に在るもの姿と気配を外界より完全に遮断し、自在に空を浮遊する移動城砦。紅世の王、髓の楼閣ガヴィダが建造・

「うわー、実際に見てみると本当にでかいな」

俺は生の天道宮を見ることができ、感動してしまった。

「つと、いまはそれよりも、パートナーを探さないと」

ijiに来た本来の目的を思い出し、足を進めようとしたが、俺の目の前にふわふと二つの人影が下りてきた。

「うわー？」

俺は驚いて一步後ずさつた。

「お待ちしていたのであります」

『会合期待』

その人影の片方から二人分の声が聞こえてきた。・・・あれ？今
の声って、この人もしかして・・・

その二つの人影は片方は丈長のワンピースに白いヘッドラレスと
エプロンを纏つた一見してメイドとわかる装い。肩まで切りそろえ
た髪に、無表情な端正な顔立ち。

「ほつ、お前が私たちのマスターか、男と聞いていたんだが、違つ
たか？」

と、もう片方の人影の美しい金色の髪にゴスロリような服の上に
黒いマントを着た十歳前後の可愛らしい少女が外見に似合わない話
し方で聞いてくる。・・・つてこの子は・・・

そう、俺の前に現れたのは、万条の仕手ヴィルヘルミナ・カルメ
ルと真祖の吸血鬼エヴァンジエリン＝A＝K＝マクダウェルだつた。

－－万条の仕手ヴィルヘルミナ・カルメル：灼眼のシャナの登場
人物。夢幻の冠蒂ティアマト－のフレイムヘイズ。何万ものリボン
を自在に操り敵を翻弄しながら戦う戦法を得意としており、まるで
舞い踊るように戦う様から他のフレイムヘイズや紅世の徒からは
戦技無双の舞踏姫の異名で知られている。シャナの育ての親の一
人で弔詞の詠み手マージヨリー・ドーとは飲み友達－

－－真祖の吸血鬼エヴァンジエリン＝A＝K＝マクダウェル：魔

法先生ネギま！の登場人物。外見は十歳位の可愛らしい少女だが正体は数百年の年月を生きてきた吸血鬼の真祖である。主人公のネギの父ナギに惚れて自分のものにしようとしたが返り討ちにあい登校地獄の呪いを掛けられ魔帆良学園に強制的に入学させられる。今は呪いのせいで力が弱まっているが、かつては闇の福音ダークエヴァンジェルや多くの異名で恐れられた悪の魔法使い。ネギとは最初は敵同士だったが糺余曲折の末ネギを気に入り自分の弟子にする。いまだにナギに惚れてい る - -

「どうしてこの二人が・・・? ま、まさか・・・・

「あ、あの、えっと・・・・君たちが俺のパートナー・・・なのか?」

一応、俺は一人に聞いて確認をしてみる。

「そのとおりであります」

『正鶴』

「ああ。私たちがお前のパートナーのユニゾンデバイスだ」

「えつ? ユニゾンデバイス! ?」

俺はエヴァンジェリンの言葉を聞いて驚いた。この二人がユニゾンデバイスだなんて。

「それ・・・どういふこと?」

「その言葉のとおり、私たちは本人というわけではなく、女神によ

つてヴィルヘルミナやヒュアンジヒリンを素に作られたあなたのためのデバイスというわけあります」

「そ、そりなんだ」

にわかには信じ難い話だけど、ルティアさんならやるだろうな・・・と納得している自分もいる。

「それともう一つ、女神からあなたに渡してほしいと頼まれたものがあるのであります」

「え？ なに・・・？」

ヴィルヘルミナはエプロンのポケットに手を入れて何かを取り出してその手を俺のほうに向ける。

「これなのであります」

ヴィルヘルミナが出したものは黒い宝石に金の輪を意匠したペンダントと群青色の珠に金の鎖をつけたブレスレット。

「これ・・・ペンダントのほうは明らかに神器『キユートス』だけど、ブレスレットのほうはわからないな。」

「ヴィルヘルミナ・・・って呼んでいいんだよね?」このペンダントとブレスレットは?」

「マスターのお好きなよう?」。この一つはマスターの専用デバイスなのであります」

「俺のデバイス?」

「ああ、女神がわざわざお前のために作った特注品だ」

ヒューバンジーリングが答える。

まわか専用デバイスまで作ってくれるとは……ルティアさんサービス精神旺盛すぎじゃあ……

「ま、せっかくだし、好意に甘々よつか」

俺はヴィルヘルミナからデバイスを受け取る。すると……

『お前にお皿に掛かる、そなたが我が主なのだな?』

『ほおー、じつやまだずいぶんな別嬪さんだな!……ほんとに男か?』

受け取ったデバイスが話しかけてきた。この声、ペンドントのほうはアラストールでブレスレットのほうはマスクシアスか?

「ああ、俺は神羅燎。よろしくな」

『つむ。では主よ、わつわへマスター認証をせぬか?』

『おつ、やうだな。はええとい済ませちまおいつ?』

「ああ、やうだな」

一人?の言葉に頷く俺。

「では、我々も」

「そうだな。この際全員一緒に済ませないか? マスター」

全員一緒に・・・まあ、そのほうが手っ取り早くていいか。

「わかった。全員一緒に認証しよう」

エヴァの提案に賛成して俺はペンドントとブレスレットを両手に持ちヴィルヘルミナとエヴァの前に立つ。

俺は魔法陣を開く。

「マスター認証、神薙燎 デバイス名設定 インテリジョントデバイス アラストール、マルコシアス ユニゾンデバイス ヴィルヘルミナ・カルメル、エヴァンジョンジョン=A=K=マクダウェル」

『認証完了』 我は今より神薙燎を主と認める。我が紅蓮は主に仇なすすべてを焼き尽くせん』

『認証完了』 よろしくな我が爪牙の扱い手、神薙燎。我が爪牙はいかなる敵おも引き裂き食らう尽くす』

『認証完了』 あなたの道の果てる時まであなたと共にに行くことを誓うのであります』

『認証完了』 お前を主と認めよつ、坊や。お前を害そつとする者は誰であつとを永久の闇に落としてやう』

「・・・・ああ、みんな、これからよろしくなーーー！」

俺は精一杯の笑顔をこれから一緒に戦っていく仲間たちに向けた。

第六話 合流 二人のパートナー（後書き）

どうもロキです。いかがでしたか？

なぜヴィルヘルミナとヒヴァにしたのかといつと・・・ぶつちゅ
け私が好きだからです。

まあ、こんな感じで今後も書いていきます。何卒応援をお願いし
ます。

ではまた次回お会いしましょう。

主人公&テバイス陣 プロフィール（前書き）

というわけでプロフィール作ってみました。

ネタばれも含みますがよかつたら見てください。

主人公&テバイス陣 プロフィール

主人公

名前：神薙燎
かんなぎりょう

性別：男（の娘）

年齢：20歳 5歳

容姿：灼眼のシャナのシャナ

能力：ちょうえつしんぎ超越神技 - 自分の知っている技や能力を全て使える。例：
マンガやアニメの技等、他にも自分で編み出したオリジナルの技、
能力も使用可能。

幻想神具げんそうしんぐ - 頭に思い描いた道具をそのまま作り出すことが
できる能力。Fat eの宝具やネギまのアーティファクト等。オリ
ジナルの武器を創造することも可能。

戦神化せんじんか - 自分の能力を完全解放する奥の手、身体能力や魔
力値なども測定不能となり世界の理から外れた存在となるためどん
な魔法や技も無効化されてしまう。ただし一度使うとその反動で二
十四時間一切の能力が使えなくなってしまう。ただし身体強化など
は可能。

身体能力：EX

魔力値・E×ランク

魔導師ランク・SSSランク

魔力光・炎と見紛う紅蓮

バリアジャケット・黒いアンダーシャツとズボンの上に夜笠を着た姿

備考：車に引かれそうになつた少女を助けた代わりに死んでしまつたが、たまたま現世を観察していた女神ルティアにその行為を認められ、リリカルなのはの世界に転生することになった青年。性格は優しく、目の前で困っている人を見るとどうしても放つておけないお人好し。生前はかなりアニメやマンガが好きでリリカルなのはシリーズもよく見ていたため原作には詳しい。よく不良に絡まれていた友人やクラスメートを助けていたため、素手の殴り合いに自信がある。与えられた能力を使いなのはたちを悲劇の運命から救うために奮闘する。戦闘で本気を出すときは炎髪灼眼の打ち手の姿になる。

デバイス陣

・アラストール・インテリジェントデバイス

形状：金の輪が意匠された黒い宝石のペンダント（まんま神器コキュートス）

性格：堅物で生真面目、しかし主である燎をいつも心配している。燎を自分の主として全幅の信頼をあてている。

・マルコシアス・インテリジェントデバイス

形状：群青色の珠に金色の鎖をつけたブレスレット

性格：騒がしく無作法で下品だが仲間思いで情に厚い。燎のことをからかいつつも最高の主だと 認めている。

・ヴァイルヘルミナ・カルメル：ユニゾンデバイス

外見：灼眼のシャナのヴィヘルミナ

性格：無表情で無愛想に見えるが本当は情け深く感情的、礼儀正しく語尾に「～であります」を つける畏まつた話し方をする。常に燎の傍らに控えており、燎のためならばいかなる

危険も厭わない。燎の笑顔に魅了されてしまい主従を越えた想いを燎に抱いているが普段は 鉄面皮で隠している。作られる際ルティアによつて少しばかり改良されたため原作のヴィルヘルミナと違ひ料理が得意。

能力：原作と同じ数万本のリボンを操つて戦う。本気を出すときは専用デバイス、ティアマト・ を周縁に鬱のようなりボンがはえた狐のような仮面に変化させる。ユニゾン時には燎がテ ィアマターの仮面をつけヴィルヘルミナの能力を使えるようになる。その際燎の髪の色は 桜色になる。

・エヴァンジェリン＝A＝K＝マクダウェル・ユニゾンデバイス

外見：魔法先生ネギまのエヴァンジェリン

性格：尊大な性格で主である燎に対しても同じように振舞うが、内心では燎を唯一無二の主として認めている。傍若無人なように見えるが弱者を躊躇するような行為は決してせず、涙もろい

一面もある。ヴァイルヘルミナと同じように燎の笑

顔に魅了され惚れてしまつ。何とか平静を保てるよう

に日々苦労している。吸血能力はあるが衝動はない。

能力：主に原作と同じネギまの氷系と闇系の魔法を使用する。他にも補助程度に幻術なども扱える。補助といつてもティアナのそれとは段違いのレベル。ユニゾン時には燎の髪が銀髪になり氷属性と闇属性の魔法の威力が数十倍に上がる。

主人公&テバイス陣 プロフィール（後書き）

これが主人公とテバイス陣の紹介です。いかがでしたか？

自分でも少しチート過ぎかとも思ったのですが、これでなんとかやつていきます。

それではまた次回お会いしましょう。

第七話 孤独の少女に救いの手を（前書き）

ついに主人公が魔王の少女と出会います。

ここまでけつこう掛けかりましたがようやくです。

はたして主人公は少女を孤独から救い出せるのか？

では第七話始まります。

第七話 孤独の少女に救いの手を

Side 燐

無事にマスター認証を済ませた俺たちは天道富から転移して、ヴィルヘルミナの案内でルティアさんが用意してくれた家へと向かった。

途中、ヴィルヘルミナとエヴァの顔が赤いような気がしたが、気のせいだろうか。

そして、田的家の着いてみると、なんとそこは *Fate/stay night* の衛宮士郎の家だったのだ。

ルティアさん……あなたも好きですね……

三人で住むには少し大きいような気もしたが、天道富よりはまさかと思うことにした。まあ、あつちは城だしな。それからそれぞれの部屋を決めて、俺は今外出するために玄関で靴を履いている。

「どちらへお出かけでありますか？」

『ぎょうこうせんめいじへ』
行先報告

後ろから声が掛かって、振り返つてみると、ヴィルヘルミナが立っていた。

「ちよっと、そこじり辺を散策にな。この町の地理も知つておきたいし」

俺は無難な答えを出す。

「では、私たちも『一緒に』

『同伴申請』

ヴィルヘルミナとティアマターが同行を申し出る。・・・・しかし。

「大丈夫だよ。そんなに遠くには行かないし、そんなに遅くならない内に帰つてくるから」

やう言つて、ヴィルヘルミナ達の申し出を断る。

「しかし・・・・」

ヴィルヘルミナは顔を顰める。心配してくれるのは嬉しいが、今回はある目的のために一人のほうが都合が良いのだ。

「平氣だつて、アラストールやマルコシアスも一緒に

「・・・・・わかつたのであります」

『了承』

ヴィルヘルミナは少し考えるそぶりを見せた後ティアマターも一緒に承諾してくれた。

「それでは、私たちは美味しい夕飯を作つて待つてゐるのあります」

「

『晚餐期待』

「わかつた。それじゃあヴィルヘルミナ、いつてきます

『では行つてくる。留守を頼むぞ、万条の仕手
『ま、なにかあつたらすぐに念話で知らせるからよ。んじゃ、行つ
てくれるぜ』

俺たちはそれに返事をする。

「行つてらつしゃいなのであります」

『帰宅待望』

ヴィルヘルミナ達の見送りを受けて、俺たちは家を出た。

家を出てから一時間くらい経つて、家の近所の大体の地理を把握し終えた俺は今町をぶらぶらと歩いている。

(近所の地理は大体分かったし、そろそろ本来の目的に移るか)

そう思つて俺は公園を探した。何故かといふと恐らくそこに俺の目的である人物がいるはずだからだ。しばらく歩いてようやく小さな公園を見つけた。俺はその中に入つてあたりを見回す。そして俺の目にあるものが留まつた。それは、ブランコに乗つているどこか寂しげな雰囲気を漂わせている今の俺と同い年ぐらいの少女だった。

「…………見つけた」

俺は遠目からその少女をじいと見つめる。栗色の髪を短いツイントールにしている、可愛らしく顔立ちに暗い表情を浮かべている。原作開始時よりも幼いが間違いない。彼女こそ将来、管理局の白い悪魔、魔王の異名で恐れられることになる少女。原作の主人公高町なのはである。

「アラストール、マルコシアス、あそこ」のブランコに乗つてゐる女の子、見えるか?』

『む?・・・うむ、見えるが?』

『あの嬢ちゃんがどうかしたのか?』

『彼女が原作の主人公、高町なのはだ』

俺は一人になのはのことを教える。

『ほう、あの子が・・・』

『へえ~、そうなのか。しかしあの嬢ちゃん、なんか妙に暗くねえか?』

「」の頃、なのはの家のでちよつとしたトラブルがあつてな、多分それが原因だろ?」

なのはの家の事情を搔い摘んで説明する。

『なるほどな。お前の外出の本日の目的は彼女か』

「ああ、まあな。でもこんな簡単に呑めるとは思つてなかつたよ」

『ははは～ん、わづかい。．．．で～．．．どうすんだ? 我が慈悲深きお人好し、神薙燎?』

「．．．．．．決まつてゐだろ」

マルコシアスの問いかけに俺は薄く笑いを浮かべてなのはに近づく。

「ねえ、どうしたの?」

なのはに出来るだけ優しく話しかける。

「ふえ・．．．・．．?」

なのはは可憐らしい声を出して、顔を上げてこちらを見る。．．．．．．あかん、マジで可憐ええわ、この子。お持ち帰りしたい。．．．．．つと、いかんいかん。思わず、某鉛女のよつなことを思つてしまつた。

「えつと．．．．．あなたはだれ?」

なのはが少し泣きそうな声で聞いてくる。

「俺は燎、神薙燎っていうんだ。君の名前はなんていうの？」

「な、なのは。たかまちなのはなの」

「なのは・・・・・いいね、可愛い名前だ」

俺はそう言つてなのはに笑顔を向ける。

「ひえっ！？」

ん？・・・なんだかなのはの顔が赤いけど、どうしたんだろう？

「じゃあ、なのはって呼んでもいいかな？俺のことも燎でいいから」

「え？ ・・・ うなづかやん？」

りようちやん、りようちやんね。これは間違いなく勘違いしてる
な。

(うへへへへ 。 じ あ ま ひ う ま か ・ ・ ・ うへへへ)

（ふつ、ふせはつ、つよ、つよいぢやんつて、ねめ、や、やべつ・・・・し、死ぬ。ふふつ）

・・・・・なんだか、なぜか無性にこのトバイスビュロの世界でお馴染みの HANASHI をしたくなつてきただが。まあ、今はそれよりもなのはの誤解を解くのが先だな。

「えーっと、なのは？勘違いしてるみたいだから、俺は男だから」

「ふえつーへー、わづなのへー、『めんね。だつてす』と可愛い顔してるから」

「ぐはりー・・・・・・け、けつゝけつゝにもんだな。可愛いつて言われるのつて・・・・・。」

「う、うん。大丈夫。気にしてないから。女顔だつて自覚あるし・・・」

なんせ、シャナの顔だもんな。無理もないか。

「それで、なのははなんでもわづか寂しつな顔してたの？」

氣を取り直して俺はなのはに質問する。

「えつ？そ、そんなことなことよ。なのは、べつに元気しきなんて・・・」

「そんな顔で言われても説得力なことよ。なあ、なのは。俺でよければ話してみるよ。何ができるかわからないけど、話を聞くぐらいなら出来るから」

本当は知つてゐるが、俺は敢えてなのはに聞く」と云ふ。彼女の心の闇をほんの少しでも理解するために。なのははじまじく俯いていたが、やがてぽつぽつと話し始めた。

「あのね、なのはのお父さんがね、じこにあつてね、おおけがしちやつたの。それでね、お父さんがよくなるまでお店をがんばらなきやならないの。それで、お母さんとお姉ちゃんはすくなく忙しそうで、お兄ちゃんはなんだか毎日怖い顔してるの。みんな、誰もなのはのこと見てくれないの……ひつゝ、だれも、なのはのこと……うつゝ……かまつてくれないの。……でも、いま、みんなすくへ忙しいから……ひくつ……わがままにつちや……いけないの……ひつゝ……がまんして、いいこでいなくちや……いけない。いいの……ひつゝ……ひくつ……がまんしなくちや、いけないの……ひつゝ……がまんして、いいこでいなくちや……ひくかけたら……ひくつ……みんなのはのこと……あらここ……なつちやうから。そしたらなのは……ひとりがつになつちやうから……だから……うつゝ、うつゝえ

……ああ、やつぱじのときのトライアスマがなのはの生き方を決めたんだ。誰にも迷惑を掛けたくない。迷惑を掛け、嫌われて、独りぼっちになりたくない。だから、体の限界なんて考えずにあんなにボロボロになるまで無茶をし続けたのか。その気持ちはわからなくなはない。でもそれじゃあ、あまりにも……あまりにも……

「なのは……」

フワツ

「ふえつ？」

気が付くと俺はなのはを抱き締めていた。

「り、りょうくん・・・・?」

「・・・・・しなくていい

「え・・・・?」

「がまんなんてしなくていい

俺は囁くように訴えかける。「の馬鹿みたいに優しく不器用な少女の心に俺の気持ちが届くよう。

「で、でも・・・」

「無理して、我慢して、良い子でいることなんてないんだ。辛いんなら辛いって言つていいんだ。苦しいなら苦しいって言つてもいいんだ。誰もそんなことでなのはのことは嫌つたりなんてしないから」

「つようくん・・・・」

「なあ、なのは。言葉つてなんのためにあるのか知つてるか?」

「え・・・?」

「それはな、伝え合つためだ。自分の想いや気持ちをちゃんと言葉にして相手の心に届けるためだ。言葉だけじゃ伝わらぬこともある

だろう。でも言葉にしなきや伝わらない」とだつて確かにあるんだ

言葉にせず気持ちのすべてを伝えられるならどんなにいいか。でも人はそんなに器用じゃない。そんなことができる人間なんて滅多にいないだろう。だから言葉が必要なんだ。伝えたい想いを、知つてほしい気持ちをちゃんと相手に届けるために。

「なのは、言いたいことがあるならちゃんと言つんだ。言いたい言葉や気持ちを無理に押し込め続けるといつか心が壊れてしまう。伝えたい言葉を相手に伝えることは全ての人間が持つ権利だ。誰もそれを責めることはできない」

「・・・・・」

「だからなのは、お前も我慢なんかするな。言いたい言葉を、自分の家族に伝えるんだ。大丈夫、きっとお前の家族は聞いてくれる。お前が家族を好きなのと同じくらいお前の家族もお前のことが大好きなはずなんだから」

「うん、うん」

「それとな、なのは、自分ひとりじゃできないことがあつたら誰かを頼れ。お前は一人で頑張りすぎだ」

「そ、そつかな？」

「そうだ。誰にも頼らないってのは強いつてことじゃない。それはただ誰かを信じるのが、誰かの手を掴むのが怖いだけだ」

「うん。・・・・・あ、あのねりょうくん、お願いがあるんだけど・・

・・いいかな?」

「お願い?・・・ああ、ここぞ。重つてみるよ」

「あのね、いまだけ、思いつきり泣いてもいい?それでなのはが泣き止むまで抱き締めてくれる?」

これは・・・俺の言葉を受け入れてくれたといつて良いんだろうか。

「当たり前だろ。思いつきり泣けばいい。俺はお前が泣き止むまでいつててやる。だつて、俺たちはもつ・・・友達なんだから」

この言葉を皮切りになのははの皿から涙が溢れ出ってきた。

「う、うわああああん……れ、せびかったよおつ……くるしかつたよおつ……すつと、せびしへ、くるしへ、つひへて、なきたくて、でも、だれにもいえなくて……ひ、ひ、ひへ。うえええん……」

抱きついて俺の胸で泣きじゃくるのはを俺は優しく抱き締め続けた。彼女が今まで心の奥に溜め込んでいたものを全て吐き出して心から笑えることを願いながら。

この日、少女を縛り続けていた孤独という名の鎖は全て碎かれた。一人の心優しき少年の想いといつ名の劍によつて。

第七話 孤独の少女に救いの手を（後書き）

さて、いかがでしたでしょうか？

私としても今回のはかなりの自信作なのですが。

では感想や意見などいつでもお待ちしております。

また次回お会いしましょう。

第八話 炎髪灼眼と白い魔王（前書き）

どうも口キです。時間ができたので、更新させてもらいました。

なのはの心を孤独から救つた燎、さて彼の次の目的は・・・?

それでは、第八話始まります。

第八話 炎髪灼眼と白い魔王

Sideなのは

わたしのなまえは、たかまちなのなまえです。今わたしのこえはとてもたいへんです。お父さんがじこにあつて、おおけがをしてしまいました。お母さんとお姉ちゃんはお父さんがよくなるまでお店をがんばらないといけません。お兄ちゃんはなんだかいつも怖い顔をして剣をふっています。

みんな、なのはのことをみてくれません。なのはは毎日ひとりぼっちでさびしいです。でもがまんしないといけません。わがままを言つてみんなをこまらせたくないから。だからわたしはひとりぼっちでもがまんしていい子でいないといけません。わがままをいつたら、きっとみんななのはのこときらいになっちゃうから。・・・でも、やつぱりひとりぼっちはさびしいです。なきたいです。でもなにちやだめです。なのはいい子でないといけないんです。・・・でも・・・でも。

そんなときでした。

「ねえ、じりかしたの？」

「ふえ？」

とつぜん、こえを掛けられました。見上げてみると、きれいな黒いかみをした、とても可愛い女の子が立っていました。

「えっと……あなたはだれ？」

わたしは誰なのかを尋ねました。

「俺は燎、神薙燎つてこうんだ。君の名前はなんていうの？」

おんなのことは、いつも答えました。でも女の子なのにおねつてちょう
つとおかしいです。

「な、なのは。たかまちなのはなの」

わたしは自分の名前を言いました。

「なのは……いいね、可愛い名前だ」

いつも言つてそのままわたしに笑いかけました。

「ふえつー？／＼／＼

わたしは思わずドキッとしてしまいました。だつてその子の笑顔
はとてもきれいで、かわいくて、そしてとても、やさしい笑顔だつ
たから。

「じゃあ、なのはって呼んでもいいかな？俺のことは燎でいいから
いつも言われたので、わたしは名前を呼んでみました。

「えつと……つよつ……ちやん……？」

「え？……りょつちやん？」

わたしがそう呼ぶとつよひかやんは田をパチクリさせました。・
・あれ? なにかいけなかつたかな?

「うそ。つよひかやん」

わたしがもう二度、つよひかやんのなまえを呼びました。

「えーっと、なのは? 勘違こしてみたいただから、うそとくせび、俺
は男だから」

「ふえーーー、やうなのーーー、めんね。だつてす、うそ可愛い顔
してゐから」

びっくりしました。なんとつよひかやん・・・・いえりよしぐん
は、男の子だったのです。あんまり可愛い顔してるから女の子かと
思つてしましました。わたしはつよしぐんにあやまつました。りょ
うくさんは氣にしてないと言つてくれました。

「それで、なのははなんでもうそを寂しがつた顔してたの?」

つよしぐんはふこにんがうるさい聞いてきました。

「えつ? そ、そんなことなこよ。なのは、べつにうびしくなんて・
・」

つよしぐんにうるさい聞かれてわたしはさつき泣き声になつてたの
を見られたと思つて慌ててわらつてこたえました。

「そんな顔で言われても説得力ないよ。なあ、なのは。俺でよけれ

ば話してみるよ。何ができるかわからなにかと、話を聞くべぐりこな
ら出来るから」

そう言われて、わたしは話してこいのかまよてしました。
でもわたしは不思議と、りょうくんになり話してもいいんぢやない
かと思いました。そう思つとわたしはいつのまにかりょうくんにい
えのことを話しまじめてこました。でも話してこるうちだんだん
とかなしくなつてしまいました。

すると、つよひくんが・・・

「なのは・・・・・」

フワッ

「ふえつ?」

ギュッ

なのはのことをだきしめてくれました。つよひくんのからだは、
あたたかくて、なんだかすくべあんしんします。それによつても一
いにおいがします。やさしこれお口やめみたいなこおこ。

「う、りょうくん・・・・?」

あんまつこきなりだつたから、なのはがびくつしてこると。

「・・・・・・しなくていい

「え・・・・?」

「がまんなんてしなくていい」

「うつむかへてここましした。

それからりょうひくんは、たぐれたの「」とをなのまにおしゃってくれました。がまんなんてしなくていい、ここ子でいなくてもここ、言いたいことがあるのならちやんと書く、ひとりでがんばらな「」で、こまつたときはだれかにたよる、それははなつしてわることじやない。りょうひくんの「」とばを聞いてころとまつとくるしかったなのは、のむねのおぐがあつたかくなつてこくよつな涙がしました。

わたしはもうがまんができるくなつてきて、りょうひくんにないでいるあいだだけだきしめることおねがこするとつようくんは・・・

「当たり前だる。思つてあり泣けばいい。俺はお前が泣き止むまで」
「うつむかへてやる。だつて、俺たちはまつ・・・・・・友達なんだから」

その「」とばをきこて、すいへつれしづなつてわたしがまつげんかいでした。いまだむねのおぐにおじこめてこたものを、せんぶはきだすよつこわたしがまつげんにだきつこつおねいえでなきました。

つようくんは、わたしが泣き止むまでまつとまつてだきしづないでくれました。

Side End

Side 燐

なのはがよつやく泣き止んで俺たちは今、公園のベンチに座つて
いる。かなりの時間なのはは泣いていた。ずいぶんと長い間溜め込
んでいたのだろう。これで少しほなのはの心を軽くできればいいの
だが。

「あ、あのね、りょうくん。ごめんね、なんだかいっぱい泣いちゃつて」

隣に座っているなのはが謝ってきた。

「謝らなくていい。言つたろ？泣きたいときは思いつきり泣けばいいって。それでなのはの気が晴れたのなら、俺は満足だよ」

俺はそう言つてなのはに笑いかける。

うん。ありがとね、りょうくん／＼＼＼＼

なんだかなのはの顔がまた赤いのだが、風邪でも引いたのか？

(なあ、アラストールよお、これってよ)

（・・・・つむ。間違いないだろつむ。まつたく、随分と罪作りな
ことだ）

(つうか、燎のやつ、ぜつて一氣づいてねえよな?)

（ヒルやハルのよひだな。やれやれ、我らが主は些か以上に鈍感な
よひだ。ヒルハルのミステスを思い出す）

・・・・なんかすゞく失礼なことを言われたよつな気がするのはなんだ?

「つょうくん、本当にありがとね。わたしすゞくうれしかった。がまんしなくていいって言つてくれて、泣いてもいいって言つてくれて、それから・・・・友達だつて言つてくれて・・・・」

なのはは笑いながらそんなことを言つてくる。むづ、俺としてはそんなに大したことを見たつもりはないのだが・・・・改めて言わると、なんだか恥ずかしいな・・・・。

「氣にするなよ。俺たちが友達なのは本当だろ?俺たちはもうお互いに名前を呼んでるんだから」

「なまえを呼べば友達なの?」

「そうだよ。いいか、なのは?友達を作るときに一番大切なことはな、まず名前を呼ぶことだ。名前を知らなきや友達になんてなれないからな。だからまず、名前を呼ぶんだ。君とかあなたとかじやなく、相手の目を見てな。それが友達になるための第一歩だ。名前を呼ぶこと、全部まずはそこからなんだ」

「なまえをよぶこと・・・・うん!わかつた!!--

なのはは弾けるような笑顔で答えた。ああ、これだ。俺が見たかったのはこの笑顔なんだ。俺はこの笑顔を護るためにこの世界に来たんだ。と俺は改めて自分の気持ちを確認した。

それにもしても、こんな優しい子にこんなに寂しい思いをさせるなんて、共誼のやつはなにをやつてるんだ。こんなときこそ長男が家

族を支えなきやいけないんだらうが。」これは少し〇 H A N A SHI-Eをする必要があるな。

「つょ「うくん~」じつかしたの?」

と、なのはが聞いてきた。おつと、いかんいかん。つい考え込んでいたようだ。

「いや、なんでもないよ。大丈夫」

俺はあたりをわりのないよう答えた。

「せうと、こつまでも座つてもつまらないし、遊ぼつか、なのは?」

「うん~遊ぼつかうく~」

俺の誘いに嬉しそうに答えるなのは。

「それじゃあ、なにして遊ぼつか?」

「なのは、おじいじがしたいの~」

「鬼~」うこね、じゃあなのはが鬼な~。」

やう言つた瞬間、俺は走つて逃げだした。

「いやあ~?り、りょ「くんずることよ。まつて~。」

不満を言つながらもびにか楽しそうに俺を追いかけるなのは。俺

たちの鬼ごっこが始まった。

（なのははもう大丈夫そうだな。さて次は・・・・・士郎さんだ）

俺はなのはから逃げ回りながら、次の目的を定める。

第八話 炎髪灼眼と白い魔王（後書き）

さて、いかがでしたでしょうか？

次回は土郎の治療とシスコンとの対決です。ついに燎のチートの一端が垣間見れるかもしません。

それでは「」感想や意見などお待ちしております。

次回をお楽しみに。

第九話 治療（前書き）

申し訳ございません。シスコンとのバトルを書くつもりだったのですが。

楽しみにしていただいた方々、本当に申し訳ございません。

次回こそ本当に✓Sシスコンです。

S i d e 燎

あの後、俺はなのはと鬼ごっこをしたり、かくれんぼをしたりと思いつきり遊んだ。なんだか前世の子供の時よりも遊んだよつた気がする。ちなみに遊んでいる時になのはが四、五回ほど転んだ。幸い怪我はしなかつたが、どうやら運動神経が切れてるというのは本当のようだ。

まあ、そんな感じで俺たちは一、三時間ぐらい遊びまわった。な
のはも楽しんでくれたようで何よりだ。しかし、流石になのはは疲
れてきたようだ。俺のほうはそんなに問題ないのだが。ま、一、二、三
邊で今日はお開きにするか。

「なのは、今田せむしりがでにしおり」

俺はなほに終わりであるよひに詰ひ

「え～？ でも～」

「どうやらなのはは不満そうだ。いや、一時間以上も遊んでもまだ足りないんかい、」この子は。

「だめ。あんまり遊びすぎると疲れて動けなくなっちゃうだろ。今日はもう終わり。いいな？」

なのはの頭を撫でながら優しく言つ。

「う～、は～い」

返事はしたが、なのはは心底残念そうだ。

「大丈夫だよ、そんな顔しなくて。また一緒に遊ぼう」

俺はまた一緒に遊ぶ約束をする。

「ほんとー?」

俺の言葉を聞いてなのはは花の咲くように笑う。

「ああ、ホントだ。約束な。ほら、指切り」

俺は小指を突き出す。

「うんーー。」

なのはは嬉しそうに俺の小指に自分の小指を絡める。・・・そして一緒に歌う。

「ゆ～びき～り」

「げ～んま～ん」

「うそつ～いた～ら

「はりせんぼ～ん」

「の～おか

「「や～びやつた」」

歌い終わると俺たちは小指を離す。

「約束だからね。りょくへん」

「ああ、わかつてゐるよ」

「えへへ」

本当に嬉しそうだな。やつぱりなのはには笑顔が一番似合つた。
まあ、それは他の子達も同じかな。れいと、れいわら・・・・・・

「なあ、なのは。なのはのお父さんが入院してゐる病院つてどこだか
分かるか?」

俺は次の目的、士郎さんの治療をするためになのはに士郎さんの
居る病院を訊いた。

「ふえひへひ、うそ知つてゐるが、びひじへへ。」

なのはは不思議そうに聞いてゐる。

「いや、なんか心配で、お見舞いに行ひつかと想つて」

「おみまご?」

「ああ、なのはも一緒にに行ひや。一緒に来て、なのはの元氣を

分けてあげればなのはお父さんもわざとあぐ良くなれる

「ほ、ほんとー?」

なのはの問いに笑顔で答える。

「ああ、本当だ。きっと良くなる。だから、一緒にに行ひ。なのは

俺はなのはに手を差し出す。

「うさーーー、つよーーーー。」

なのはは俺の手を握り、引っ張つて走り出した。

「お父さんの病院は、じつちなのー。」

「ああー。」

なのははに案内されて俺達は土郎さんのいる病院へと向かった。

「うーが、お父さんのこぬ病院なの」

「…」が「…」

俺はなのはに案内されて、やつてきた病院を見上げた。けつこう大きな病院だ。

（了）了、士郎さんが・・・・

俺たちは病院に入つて、看護婦さんに士郎さんの病室を訊いて、向かつた。

二階まで上がつて一つのドアの前で止まつた。横のプレートに、『高町土郎』と書かれていた。

「……が、お父さんの病室」

俺はドアを開けた。中には全身を包帯で巻かれた、見るからに重傷な男の人ベッドで横になっていた。この人が、なのはの父親の高町士郎さんか。

「お父さん・・・・・」

のはは十郎さんに近づく。

「お父さんは、なにせ元氣だよ。お母さんも、お姉ちゃんも、お兄ちゃんもみんな元氣だから、でもみんなお父さんのこと心配しているよ。」

なのはせわつと十郎わんに囁くよいに囁く。

「はやく、元気になつてね。なのはの元気、いっぱい分けてあげる

から。だから……はやく……元気になつて……
・お父さん……」

とても辛そうなのはの声。それでも涙を堪えて言葉を紡ぐ。自分の祈りが父親に届くことを祈つて。

「なのは、俺もなのはのお父さんに挨拶したいから、ちょっと外で、待つてくれるか?」

なのはの肩に手を置いて外で待つように伝える。

「グスツ・・・・・・うん」

服の袖で涙を拭いてなのはは外に出てドアを閉める。

俺はなのはが外に出たことを確認すると、この病室の中で防音用の結界を張る。

「さて、これでよし」

俺は士郎さんに近づく。

「初めまして、士郎さん。俺は神羅燎、なのはの友達です。あなたを助けてにきました」

そう言つて、士郎さんに手を翳す。

「^{クーラー}治癒」

俺の翳したてから柔らかな光が溢れ出て士郎さんの全身を覆う。

俺が使った魔法はネギまの魔法の初步の回復呪文である。それでも俺が使えば個程度の傷数分で跡形も残さず治療できるのだが、あまり一気に治すと怪しまれるので意識が戻る程度に止めておく。

やがて、徐々に光が消えていく。そして土郎さんを覆っていた光が全て消えた。治療が終わったのだ。

「ふう。とりあえずこんなもんかな。どうだアラストール、マルコシアス？」

俺は治療の出来をアラストールとマルコシアスに訊く。

『ふむ、悪くはないな』

『まあ、初めてこしあやあ上出来なほうだな』

一人から及第点が出る。

「そつか……良かつた」

俺は安堵の息を吐いた。

「さて、治療も済んだし、そろそろ出るか

『うむ、それがよから』

『だな、あんまり遅えと嬢ちゃんが変に困りだらうしな』

結界を解いて、俺はドアを開ける。廊下でなのはが椅子に座つて

待っていた。

「あ、じょくくん。もつこいの?」

俺に気づいて近寄つてくれる。

「ああ、まあな。で、帰ろうつづ家まで送つてへど

俺はまたなのはこてを差し出す。

「うさつーーー

なのはは笑顔で握り返す。

俺たちは来た時と同じように手を繋いで病院を後にした。

第九話 治療（後書き）

次回は必ずシスコンに O - H A - N A - S H I です。

楽しみにしててください。

何か感想や意見などありましたらいつでもお送りください。

ではまた次回お会いしましょう。

第十話 対決 御神の剣士（前書き）

さて、今日は高町家のシスコンとのバトルです。

戦闘描写が上手く書けたか不安がありますが、頑張つてみました。
では第十話始まります。

第十話 対決 御神の剣士

Side 燐

士郎さんの治療を終えた俺はなのはと手を繋いでなのはを家まで送つて いる途中である。俺は歩きながら士郎さんの負つた怪我について考えていた。あんな重傷を負つて生きているなんて流石は御神の剣士といったところか。それと治療しているときに思ったが、士郎さんほどの実力者がそんな簡単に事故にあうものだらうか？・・・

・まさか、誰かに命を狙われた？

あり得ないことじやない。俺はとらハのことはよく知らないが、たしか士郎さんは桃子さんと結婚する前は要人のボディガードをしていたと聞いたことがある。もし命を狙われたのなら、やつたのは間違いなく士郎さんに仕事の邪魔をされた連中だろう。そして士郎さんが死んでいない以上また士郎さんを襲う可能性がある。今度はなのはたちにまで危険が及ぶかもしれない。十分注意しておこう。さしあたり、なのはの家の周りに式神をいくつか放つて見張らせておくか・・・。

「・・・・・くん。・・・りょうくん」

「・・・・・ん？」

「どうかしたの？」

なのはが俺の顔を覗き込んでくる。・・・ちょ、近い近い。

「いや、なんでもないよ。ちよつと考え事してただけ

俺はちよつてなんでもない風に振る舞い。

「ふうふ。・・・・・あ、りょうへん、あそこがなのはの家なのー。」

なのはは綺麗な看板のついたお店を指差す。その看板には【喫茶翠屋】と書かれていた。

（おお、ここが翠屋か。まさか生で拝める日がようとうな）

俺はリリなこの世界で有名な喫茶店翠屋に実際に来ることができちよつと感動している。

「よかつたらねこつて、りょくへん。お母さんたちに紹介したいか

なのはは俺にお店のなかに入るよう促す。

「いいのか？」

「うそー。」

俺の問いかけになのはは笑顔で肯定した。

「それじゃあ、お邪魔するか

空いてるほうの手で俺はドアを開けてなのはと一緒にお店のなかに入る。喫茶店だからお店のなかからは甘くて良い匂いが漂ってきた。

「お邪魔しまーす」

「ただいまー」

店に入ると俺たちの声を聞いて、奥から女性が出てきた。

「はーー、つてあらなのは」

「お母さんー」

なのはは嬉しそうにその女性に抱き着く。・・・・やつぱりか。

「ただいま。お母さん」

「おかえりなれー。なのは」

女性は優しく微笑んでなのはを受け止める。

「の人がなのはの母親の高町桃子さんか。つていうか実際に見るとほんとに若いな。これで三人の子持ちつて、ありえないだろ。なんだ、高町家はサイヤ人の血でも引いてるのか？・・・・ありえそうで怖いな。

「といふでなのは、この子はどなた?」

桃子さんが俺のことを語りてくれる。

「つょづくとつてこいつのーなのはのお友達になつてくれたのー」

なのはは嬉しそうに俺を紹介する。

「初めまして、神羅燎です。なのはちゃんの友達になつました」

俺も自己紹介をする。

「なつなの。ありがとうございます。ちやんといえさせて、偉いわね」

桃子さんは優しい笑みを浮かべて俺の頭を撫でる。・・・・・むう、これは完全に子ども扱いされてるな。まあ、今の俺の外見じゃあ仕方ないか。

「でもなのは、女の子なのにこなつて變じやない？」

と桃子さんは俺の呼び方を指摘する。・・・・・って桃子さん！ あなたもですか！ ？

「あ、あのねお母さん。りょうくんはね、男の子なの・・・・・」

なのはが桃子さんの誤解を解く。

「え・・・なつの？」

驚いた顔で俺を見て、なのはに訊く桃子さん。

「なつの」

頷くなのは。

「あ、あらやだ、私ったら……」「めんなさいね、りょくさん

慌てて謝る桃子さん。……いや、別にいいんだけどね。もう諦めたし。

「いえ、いいんです。女顔って自覚ありますから。なのはにも間違わられたし……」

そう言つてなのはをジト目で見る俺。

「うう……」

俺の視線を受けてなのははサッと目を逸らす。

「や、やう……あ、そうだわ！ ねえ、りょくさん。よかつたらケーキでも食べていかない？」

唐突に桃子さんが言つてくる。

「えつ？ でも俺、お金持つてないし」

そう、今の俺には手持ちの金が一銭もない。上手いと評判の翠屋のケーキは是非とも食べてみたいが、払う金が無いのではどうしようもない。

「いいのよ、お金なんて。なのはと仲良くしてくれたお礼に……」

「ね

そう言つて俺にウインクする桃子さん。……美人はなにをやつても様になるなー……と俺は思わず感心してしまう。つーか

「」の人ホントに綺麗だよな。ちょっとジドキッとしたぞ。こんな人とゴーリインするなんて、士郎さんもやるな。

「いいんですか？」

「もちろん」

桃子さんは笑いながら言つてくれた。ほんとにいい人だ。

「うーん、」ここまで言つてくれて断るのは逆に失礼ってものかな？それに翠屋のケーキをタダで吃える機会なんてそうそう無いだろう。このチャンスを逃す手は・・・・ないな。

「それじゃあせつかくですから、お煎葉に甘えで「なのはー」・・・・ん？」

俺が答えようとすると俺の言葉を遮つてなのはを呼ぶ声が聞こえた。声のしたほうを向いてみると、そこには十五、六歳くらいの顔つきが士郎さんに似ている青年が立っていた。

「あ、恭弥お兄ちゃん・・・・」

「あら、恭弥」

なのはと桃子さんが青年の名前を呼ぶ。

恭弥・・・・そつか、こいつがシスコンで有名な、なのはの兄貴の高町恭弥か。たしかこいつも御神の剣士なんだっけ？

「なのは、いつたいどに行つてたんだ！心配したんだぞ！」

出でくるなりなのはに怒鳴る恭弥。

「「、「めんなさいお兄ちゃん」

暗い表情で謝るなのは。・・・・・たぐ、もつじし言い方つても
のがあるだろうが。大体心配だと? どの口が言いやがる。そんなこ
と言つ資格がお前に・・・・・。

「まつたぐ、反省しろ。この件じこときに迷惑を掛けるんじや
「おこ、ちよつと待て」・・・?」

「おこ、いまここなんて言つた?・・・・・迷惑?なのはが迷惑を
掛けたつて言つたのか?・・・・・ふざけんな。今までなのはがど
んな気持ちでいたと思つてるんだ。誰にも迷惑を掛けたくないとい
い子でいようと我慢して独りぼっちで泣いていたなのはの苦しみが
分かるのか。なのはのことを見ようともしていなかつたお前に。」

「なんだ・・・・・相は?」

恭弥はやつと俺に気づいたように言つ。

「俺は神羅燎、なのはの友達だよ。一つ訊くけど、あんたがなのは
をずっと独りぼっちにしてるお兄さん?」

俺は挑発的に訊く。

「なに?」

恭弥の口つきが険しくなる。だがその程度で怯む俺じゃない。

「聞こえなかつたのか？あんたが自分の妹の面倒一つ見られない駄目兄貴かつて訊いてるんだよ」

俺はさうに恭弥を挑発する。

「なつ、なんだと！」

恭弥は案の定俺の挑発に乗つてきた。

「さつきから聞いていれば勝手なことばかり抜かしやがつて、ずっとなのはをほつたらかしにしておいてこんな時だけ兄貴面か、ここまでくると呆れを通り越して感心するよ。まったく大したものだ」

「き、貴様つ！」

すうい形相で俺を睨み付ける恭弥。

「り、りょうくん

なのはが俺を心配して声を掛けてくる。桃子さんもハラハラした様子でこちらを見ている。

「今のあんたにはねを叱る資格があんのか？この子を叱るなら、一つでも兄貴らしいことをしてから叱りやがれ！妹の面倒一つまともに見られない奴が偉そなこと言つてんじゃねえ！！」

俺は腹の底から叫ぶ。ここまで頭に来たのは久しぶりだ。

「だ、黙れ！お前に何が分かる！！」

叫び返す恭弥。

「わからんねえよー。自分のやるべきことをはなき違えて家族をほつたらかしにしてる奴の気持ちなんて分かりたくねえーー。」

「ああ、わうだ。」こつは自分のやるべきことをはなき違えてる。」

「いつが今やうなればならぬことばなし」とじやなー。」

「いいだらう。道場に来ーー。その減らす口、黙らせるーー。」

もう言つて店の奥に歩いていく恭弥。

「恭弥、待ひなさいー。」

桃子さんがあめよつとすがどつやう聞ひやうていいなことうだ。

「大丈夫ですよ桃子さん。ちょっと行つてきまーす」

俺は安心をせぬひまつて店の奥に向かつ。ひまつて店の奥に向かつの田を見ましてもいるか。

「あ、待つてうへく。なのはもーくの」

心配なのが俺につけてくるなのは。

「ああ、あつがとつ

俺はなのはにお札をまつ。

なのはに案内されて道場に着くと恭弥が一本の木刀を持って待っていた。

「よく逃げずに来たな」

「逃げる? なんでお前如きに逃げる必要がある」

恭弥の挑発に挑発で返す。

「覚悟しろ。一度とそんな口が利けないようにしてやる」

一本の木刀を構える恭弥。その構えからかなりの腕であることがわかる。

（じゅうやう）の様子じゃ、完全に頭にきてるようだな。だがな、それはじつも同じなんだよ。

（こそこなにも容易く相手の挑発に乗せられるとはな、腕のほうはともかく、精神面は些か以上に未熟なようだ）

（ありやあ完全に頭に血が上つてんな。これじゃあ、じつちが子供だかわかりやしねえぜ）

アラストールとマルコシアスが辛辣な評価を下す。

（まったくだな。しかし、だからと言つて手加減する気はないがな）

（つむ。当然だ）

（おうよ、やつちまいな。我が鋼鉄の拳骨、神羅燎……）

「行くぞ！！」

「来やがれ！！」

俺と恭弥の決闘が始まった。

恭弥は凄まじいスピードで踏み込んできて、上から剣を振り下ろす。しかし俺はこれを軽く横にずれて躱す。

「なつ！？」

驚く恭弥。どうやら今の一撃で決めるつもりだったようだ。俺を嘗めていたな。

「どうした？ 何を驚いているんだ？」

「くくそつ」

またさらに踏み込んできて剣を振る恭弥。今度は横薙ぎに振るうが俺はそれも躱す。しかし今度は恭弥も引かずにさらに打ち込んでくる。

右薙ぎ、左薙ぎ、袈裟切り、逆袈裟、切り上げ、唐竹割りと次々に両方の木刀を操り剣撃を繰り出してくるが一つとして俺にかすりもしない。俺は恭弥の剣撃全てを完全に見切り躱しているのだ。

「くそつ、なぜだー？ なぜ当たらないー？」

自分の技を悉く躱される恭弥。その顔は驚愕に彩られている。

「なぜ当たらないかって、それは簡単だよ。お前の剣は確かに速いが、動きが単純なんだよ」

そう、恭弥の剣は確かに速いが、それだけだ。頭に血が上つているせいで動きが勢いに任せすぎでいて実に読みやすい。俺は振り下ろされてくる剣を片手で掴んだ。

「なー?ぐ、くそつ、放せ!」

恭弥は俺から剣を引き剥がそうとするが、魔力で身体強化をしている俺の手はびくともしない。

「…………」んなもんかよ

「なに?」

「」んな程度の力のために、お前はなのはを傷つけたのか?」

「なつ」

「ふざけんな……」

「」「オー!」

「ぐはつー」

俺は恭弥の横つ面を思いつきり殴り飛ばした。あまりの威力に木刀を手から放して吹っ飛ぶ恭弥。

「おい恭弥、なんで士郎さんがお前に剣術を教えたと思つへ。」

「なに・・・・?」

俺は恭弥に問い合わせる。立ち上がりながら訝しげに俺を見る恭弥。

「じつして士郎さんは、お前に剣術を教えたんだ?」

俺は足を魔力で強化して軽く瞬動を使い恭弥に肉薄する。

「なつー!?

田を見開く恭弥の腹にボディーブローを叩き込む。

ドガツ!!

「(Jふ(?)ー」

「(Jんな)ことをさせるためか?お前に自分の仇を打つてもうつため
か?」

さら(?)ー、三発続けて打ち込む。

ドグツ!!ガスツ!!

「あがつー(?)はつー!」

拳を打ち込むたびに恭弥の顔が苦悶に歪む。

「違うだろ。そうじやねえだろつー!」

叫ぶと同時にアッパーを放ち、顎を打ち上げる。

ズガソツ！！！

「がはあつ！！」

恭弥の体が跳ね上がるが、俺は服の襟を掴んで逃げられないよう¹にする。

「お前に強くなつてほしかつたのは、お前に・・・・家族を護つて欲しかつたからだろ！！」

俺はまたさらに恭弥を殴る。何度も何度も殴り続ける。拳に意思を込めて殴る。俺の想いがこここの心に届くように、土郎さんの気持ちが伝わるようだ。

「自分になにがあつたときのために、自分に代わつてなのは達を護つて欲しかつたからだろ。お前ならきつと守つてくれるつて信じてたからだろ！ それなのにお前はなにをやってんだよ！ ！」

ドガツ！！ゴスツ！！

「ハガツ！…ベフツ！…」

「なのはをほつたらかしにして、怖がらせて、それが兄貴のやることとかよー！」

ドグウッ――!

「ぐはあつ！！！」

俺は一際強く拳を腹に叩き込む。一いつのひん曲がつた根性を叩き直すよつと。

「恭弥、兄貴つてのがどうして一番最初に生まれてくるか知つてゐるか？」

俺は一度殴るのをやめる

卷之三

「それはな、後から生まれてくる弟や妹を護るために

1

「その元貴が、自分の妹を苦しめてんじゃねえ!!」

卷之三

お前の父親に比べればどうで」とねえたらんかな

俺に拳を思ふにきに掘りかぶる

「少しだけお前の田を覚まさせてやる。自分のやるべき」とがなんののか、もう一度よく考えやがれ——」の馬鹿野郎——。」

アーティスト

「ぐふあああ！！」

止めの一発を顔面に叩き込んだ。恭弥は吹っ飛んでそのまま壁に激突して、そのまま落とると氣絶したのか動かなくなった。

こうして俺と恭弥の対決は終わった。

第十話 対決 御神の剣士（後書き）

いかがでしたでしょうか？お楽しみいただけたのならよかったです。

それでは今回はこの辺で。皆様からの「」意見、「」感想お待ちしております。

ではまた次回お会いしまじょう。

なるべくはやく無印編に入れるように頑張ります。

それではーー！

第十一話 これからのこと（前書き）

時間ができたので更新しました。

次の次あたりから無印編に入つていきたいと思います。

では第十一話始まります。

第十一話 これからのこと

Side 燐

恭也との戦いが決着して、俺は今翠屋で桃子さんお手製のショートケーキを食べている。ちなみに恭弥はあの後帰つてきた美由希さんが部屋に運んで行つた。

「いや～、ほんと美味しい。これなら商売繁盛間違いなしですよ。桃子さん」

俺は出されたケーキをパクパク食べながらケーキの味を称賛した。いや、まじで美味しいんだってこれ。

「そつこってくれると嬉しいわ。遠慮しなくていいからどんどん食べて頂戴ね？」

笑顔で言う桃子さん。

「はーーーあ、紅茶のお代わりください」

と、紅茶のお代わりを頼む俺。

「はーい。美由希、お願ひ」

美由希さんを呼ぶ桃子さん。

「はーい、紅茶ね」

返事が返つてき、奥から女性が出てきた。眼鏡に髪を二つ編みにした女性だ。やつる人が、なのせのお姉さんの高町美由希さんだ。

「はこどりさん、燎くん」

俺のところまで来て、カップに紅茶を注ごうくれる美由希さん。

「あつがとくわくめく、美由希さん」

美由希さんにお礼を囁く。

「うう。でも、ほんとにすうじよね～燎くん。またお恭ちゃんに勝つわやうなこと」

笑しながら自分の兄を負かした俺を称賛する美由希さん。

「うそー。つよいつくとくじくへ強かったの……」

嬉しそうに笑うのは、俺の前で回し蹴りケーキを食べるなのは。

「でも燎くん、ほんとにめんないなわこね。うかの恭也が……」

桃子さんが申し訳なさうに囁いてくる。

「いや、平気です。俺のまつもんじゅつわくわくしたとおり

も、確かにまつもんじゅつわくわくしたとおり。こいつの頭に血が上

つてたとはこえ氣絶する所である必要はなかつた。

「いいのよ。氣にしないで。子供相手にむきになつた恭也が悪いんだから」

「アリだよ。それにいいのといふ、恭ちゃんがいつともつづきてたから、こい薬だよ」

「一人は氣遣つよつて呟つてくれる。アリ呟つてくれると少し氣分も軽くなる。

「それにしてもなのは、燎くんつてそんなにすゝかつたの？」

「ふこに美由希わんせになのはに語べ。

「うそーつよづくとすうじくかつじよかつたのーーお兄ちゃんの剣片手で受け止めたやつたんだよ」

嬉々として俺と恭也の勝負を語るなのは。

「くえー、すうこねえ。あたしでも末だに恭ちゃんの剣は中々見切れないので」

感心したよつて美由希わん。

「いえ、たまたまですよ。それにあの時の恭也わんの動きはすうくへ單純でしたから。あれなら美由希わんも見切れますよ」

やう、實際あの時の恭也は怒りに身を任せすぎていた。怒りは確かに普段以上の力を与えてくれるがそれに溺れていまつのは三流の

することだ。もし恭也が怒りを制御して挑んできていたら正直危なかつたと思つ。

「それでもす」「こよ。燎くんってなにか格闘技でも習つてゐるの？」

興味深げに訊いてくる美由希さん。

「ええ、まあ・・・・そんなとこです」

俺は言葉を濁す。正直に言えば俺には格闘技の心得などない。そんな俺が恭也に勝てたのは恭也が俺の挑発に見事に乗つてくれたのとルティアさんのおかげでEXランクになつてゐる俺の身体能力、そして俺の前世の経験のおかげだ。

俺は前世で不良やチンピラに絡まれてゐる友人やクラスメート、同じ学校の生徒を見かける度に助けていた。そんなことをしているうちにケンカの腕が上がつてしまつたのだ。おかげで町の不良共の間ではちょっと名の知れた有名人になつてしまつた。ま、今の俺にはもう関係のない話だが。

「ふうんそつか。ね、今度はあたしとも手合せしない？」

と、美由希さんが俺の顔を覗き込んでそんなことを訊いてくる。

「えへつと、まあ・・・・・・機会があつたら」

俺は曖昧に返事をする。不必要的戦いはしたくないんだがな・・・・

「うんつ、楽しみにしてるね」

美由希さんはなんともいい笑顔で言つてくれる。

「じゃあ、つよいつくん。なはともまた遊ぶ約束しよ?」

「んじゃなのはが笑顔で言つてきた。

「ああ、わからん。こつぱに遊ばつかな」

「れには俺はまつわつと返す。

「うそり、えくく」

「機嫌な表情のは。こんな約束で笑つてくれるならこへりでもじてやうついて気になつてくる。

「あらあら、すっかり仲良しされね」

そんな俺たちの様子を桃子さんが微笑ましい感じで見ている。

「うふー…だつてなのはとつよいつくんはともだちだもんーー」

満面の笑顔を見てくれるなは。その笑顔とその言葉になんとかとても満たされる気持ちになつてくる俺。今心から想つ。ああ・・・
・・の子を救えて良かつた・・・・・と。

「あらあら

「あはは

そんなのは桃子さんも美由希さんも嬉しそうに見つめる。

「ふーへ、『おめでた』でした。わーと・・・じやあやめり帰ります」

俺はケーキを食べ終えて席を立つ。

「えっ? つょうべく帰つちやうの?」

なのはが寂しそうに黙つてくれる。

「うん。 いい加減帰らないと家族が心配するから」

「そっか・・・・そつだよね」

しゅんと頃垂れるのは、本当に残念そうだ。俺はなのはの頭に手を置いて優しく撫でてやる。

「大丈夫だよ、また遊びに来るから。約束しただろ?」

「・・・・・うんー」

顔を上げて笑顔を見せてくれるなのは、

「じゃあ、桃子さん、美由希さん、『おめでた』まででした。ケーキ、おこしかったです」

桃子さんと美由希さんにお礼を言つ。

「おこいたしまして。また来てね

「いつでも歓迎するから」

一人も笑つて答えてくれる。

「はいっ・・・あ、桃子さん？」

「なに?」

「あの・・・よければケーキを一つほど貰えませんか? 家族にも食べさせてあげたくて」

俺は少し図々しいかと思ったが桃子さんに訊いてみた。俺だけ翠屋のケーキを食べたことがヴィルヘルミナとエヴァに知られたらどうな目に合わされるか・・・考えただけでも恐ろしい。俺の脳裏に般若のオーラを出した二人の姿が浮かぶ。

「ええ、もちろんいいわよ。ご家族の方にまつちの味を知つてもらいたいし」

桃子さんは笑顔で承諾してくれた。

「ありがとうございます」

俺はペコっとお辞儀をする。

そして俺はエヴァにショートケーキ、ヴィルヘルミナにチョコレートケーキを貰い、店を出た。

俺は家への道を歩きながらこれからのことを考えていた。そう、

これからなのはが巻き込まれることになるそして、俺が介入していくことになる事件のことを。

プレシア・テスター・サガ引き起こすジュエルシード事件。

呪われた魔導書闇の書を巡る闇の書事件。

そして十年後に起るだらう狂氣の科学者ジェイル・スカリエッティと戦闘機人たちによる「S事件」。

さらにはその後にある犯罪者一家フックバインファミリーやエクリプスウィルス感染者たちとの死闘。

それだけではない。ルティアさんが言っていた俺がこの世界に来たことによって起こるイレギュラーのこと。

それらを想い、俺はこれから一緒に戦っていくことになる相棒たちに訊く。

「なあ、アラストール、マルコシアス」

『む？…びついた？』

『あん？…なんでえ？』

「俺は…・・・護れるのかな？…のはを、フェイトを、はやてを、みんなを…・・・護れるのかな？」

俺は自分の中にある不安を口にする。護れるのだろうか？護り切れるのだろうか？護り通せるのだろうか？そんな不安が俺の心を締める

め付ける。

そんな俺の問いに一人は・・・・・。

『ふん・・・・・何を言つている』

『けつ、何言つてやがる』

「・・・・・・・・え?」

『『当たり前だ(じゃねえか)』』

本当に至極当然のよう答えた。

「!」

『お前は誓つたのだる?あの子を護ると、これから出会つ者たちを護ると、ならば何を恐れる必要がある?』

『お前はただ、自分のやりてえことを、やりてえよつてやりやあいいのさ。俺たちはどんな時でもそれに力を貸すだけだ』

一人の言葉が俺の心に深く染み込む。

『そして、忘れるな。お前は一人で護るのではない』

『俺たちと一緒に護るんだ』

その言葉は俺の心を締め付けていた不安を根っこを消しおつっていく。

『我らは常にお前と共にいる。お前が望むのなら、我らは盾にしも、剣にもなる』

『そのために俺たちはお前と一緒にいるんだからな』

なんだろ？ 心がすくへ暖かくなつてくれる。

『共に行こう！…そして共に護り！…我らが主よ…』

『行こうぜ！…我が爪牙の扱い手、神羅燎！…』

不安は全て消し去られた。

「…・・・・ああ・・・・・ああ！…」

一人の言葉に俺は力強く答える。そうだ。何を不安に思うことがある。俺は一人じゃない。俺には一緒に戦う仲間が、一緒に大切なものを護る仲間がいるんだ。

これからたくさんのが困難や強敵が立ちはだかるかもしれない…・だからどうした。それがどうした。そんなもので俺が歩みを止めるものか。俺は誓つたんだ。なのはたちを護ると、彼女たちの運命を変えてみせると。必ず護つて見せる。そのために俺はここに来たのだから。

「行こう！…一緒に…！」

俺は前を向く、新たにした決意と覚悟を示すよ。

必ず、護る。それを「」の魂に誓つて。

第十一話 これからいの「」と（後書き）

いかがでしたでしょうか？

前書きにも書きましたが次の次あたりで、無印編に入るのを予定しております。

感想、意見等がありましたら遠慮なくお送りください。 いつでもお待ちしております。

ではまた次回お会いしましょう。

第十一話 全快パーティー（前書き）

次からようやく原作突入です。

これからはさらに気合を入れていきます。応援よろしくお願いします。

では第十一話始まります。

第十一話 全快パーティー

Side 燐

翠屋からの帰り道、俺は今日のことを思い返してみた。

なのはなと出合って、土郎さんを治療し、翠屋へ行つて恭也と決闘して、桃子さんにケーキを「」馳走になつた。

（なんか・・・今日は色々あつたなあ・・・ちょっと疲れた）

そんなことを思つてこるしふりの間にか家に着いていた。俺は扉を開けて中に入る。

「ただいまーーーーーん？」

家のなかから何やらいい匂いが漂つてきた。

（この匂いは・・・シチューか？）

俺は匂いのもとを辿つて台所を覗いてみた。そこには・・・

「ヴィルヘルミナ？」

そう、ヴィルヘルミナが料理を作つていたのだ。

「一おかえりなさいであります」

俺に気づいたヴィルヘルミナとティアマターがお帰りと言つてへ
れる。

「ああ、ただいま・・・・・なにしてるの?」

俺は思わず訊いてみた。

「?見ての通り夕飯を作つてないでありますか?」

『晚餐準備』

一人は不思議そうに答える。

「料理・・・・・できるの・・・・?」

俺は少しおかしく思った。俺の記憶が正しければ、原作のヴィルヘルミナは料理ができなかつたはずだ。これはいつたいどういうことだ?確かに夕飯の準備をしておくとは言つてたが、俺はてっきり弁当でも買つてくるものばかり・・・・。

「私は燎様の身の回りのお世話をするために女神から家事能力を与えられてゐるのであります」

不思議に思つてゐる俺にヴィルヘルミナがそつ教えてくれた。

(そつこつことか・・・・・ルティアさん・・・・・なんといふか・
・・・あ・・・・・グッジョブだ)

俺は心の中で俺をこの世界に送ってくれた女神様に親指を立てた。

「燎様、そろそろ出来上がるんでエヴァンジエリンを呼んできても
らつてもいいありますか?」

「ああ、わかつた

俺は、ヴィルヘルミナに頼まれてエヴァを呼びに行つた。

「お~い、エヴァ。」
「飯だぞ~」

エヴァの部屋の前に立つてエヴァを呼ぶ。

「ああ、すぐ行く

部屋から返事が返つてきた。俺は返事を聞いて居間に戻つた。

戻つてみるとすでに、ヴィルヘルミナが三人分のシチューを用意して
いた。

「ほお、今日はシチューか

「美味しそうだな

俺のすぐ後からきたエヴァが湯気がのぼるシチューを見て言つた。

俺はシチューの出来栄えを見て感想を言つた。

「冷めないうちにじつぞであります」

俺とエヴァは自分の席についた。

「それじゃあ、 いただぐか」

「はい」

「「「「「

「「「「 いただきますー.」」」」

俺たちは同時にシチューを口に入れた。

結論から言つと、ヴィルヘルミナの作ったシチューは最高の出来だつた。

しばらく経つて俺たちはシチューを食べ終わった。

「「「「「

「「「「「

「「「「「

「恐縮であります」

いや、ホントに美味かった。俺とエヴァなんて三杯ほどお代わりをしてしまった。

「さて、夕飯も食べたしお次は『ザートだな』

そう言つて俺はお土産をテーブルに乗せる。

「？燎様、それは？」

「燎、なんだそれは？」

一人が質問していく。

「今日、出かけたときこいつい店見つけてや、買つてきたんだよ

俺は箱を開けて中を見せる。

「これね……」

「まあ、ケーキか」

中には二つのショートケーキが入っていた。

「二人にお土産。ヴィルヘルミナ、お皿持つてきてくれる

「はいあります」

俺に言われて、ヴィルヘルミナはすぐさま皿を二つ持つてきた。俺はケーキを皿にのせる。

「はい、どうぞ」

「つづつケーキを一人に差し出す。

「わざわざ、買つてきてくれたのでありますか？」

「我らがマスターは気が利くな」

一人は嬉しそうな感じだ。

「それじゃ、いただきます」

俺たちはケーキを食べる。・・・・うん、やつぱり美味しいな。

「」、これは・・・・

「な、なんと・・・・

一人はスプーンを持った手をブルブルと震わせている。

「う・・・・うまい！」

「見事な味であります」

どうやら、翠屋のケーキは一人の口に合つたようだ。

俺はケーキを食べながら、今日あつたことを一人に話した。

じつして、俺のこの世界の初日は終了した。

それから数日間、俺はなのはと遊んだり、時折土郎さんを見舞つて治療したりとそんな感じに過ぎていていた。他にもヴィルヘルミナとエヴァを紹介したり、ヴィルヘルミナが桃子さんからお菓子作りを教わつたりと大した事件もなく至つて平和な日々が続いていた。

そんなある日、なのはから電話が掛かってきた。

「もしもし、なのは？」

「あ、あのね！ つょくん！ おとうさんがねー怪我が治つてねーお医者さんからねー電話があつて、それでこれからみんなでねー！」

「…………うん、とつあえず落ち着け」

電話の向いから聞こえてきたなのはの声はとても興奮していた。

よつある「十郎さん」が田を覚ましたとお医者さんから連絡があつて、それでこれから畠で会つて行くらしい。

「そつか…………よかつたな、なのは」

「うん……」

とても嬉しそうなのはの声、本当によかった。俺も頑張った甲斐があつたな。

「それでね、りょうくん。おとうさんがたいいんしたらみんなでお祝いするんだけど、よかつたらりょうくんやエヴァちゃんにヴィルヘルミナさんも一緒にどうかな?」

「それはうれしいけど……いいのか?」

「もちろん!お母さんもぜひきてほしつて……」

「そう言われたら断るのも失礼だな。

「わかった。お邪魔をせてもうりょう

「うん!じゃあまたね、りょうくん!」

「ああ

話し終えた俺は電話を切つた。さて、一人にもお祝いのことを伝えないとな。

それから一週間後、俺たちは士郎さんの退院を祝うために翠屋に来た。

「よく来てくれたね。初めまして、僕が高町士郎だよ

士郎さんが笑顔で俺の頭を撫でてきた。

「初めまして、神薙燎です。退院おめでとうございます」

俺も挨拶を返した。

「あはは、どうもありがとうございます。そちらの一人も来ててくれてありがとうございます」

士郎さんが後ろのヴィルヘルミナとエヴァにも声を掛けた。

「お気になさらず。呼んでいただき感謝するのであります」

「まあ、私は美味しいケーキがたらふく食えると聞いて来たんだがな」と、一人が返事をする。つていうかエヴァ、お前はちょっと自重しぃ。

「あはは、もちろん。たくさんあるからね。好きなだけ食べていってくれ」

士郎さんは大して気にしたふうもなく俺たちを歓迎してくれた。そして全快パーティーが始まった。

全員、それぞれにパーティーを楽しんでいる。ヴィルヘルミナは士郎さんと桃子さんと一緒に世間話に花をさかせている。エヴァは美由希さんと意気投合してケーキを食べまくっている。あれ？ 恭也の姿が見えないけどどこ行つたんだ？ まあ、いいか。

そして俺はといつと・・・。

「はいりょうつくん。あーんなの

俺の隣に座つたのはが俺にケーキを刺したフォークを向ける。

「いやのは、自分で食えるから」

「 どうなぜか俺は今のはにあーんをされていのだ。自分で食えると何度も言つていゐるのに全く聞きやしない。」

「いいから。あーん」

さらにフォークを近づけるなのは。つたく、仕方ない。

「あーん」

俺は口を開けてケーキを口に入れる・・・・・うん、うまい。

「えへへ・・・・・うなづくと、おいしい?」

「ああ、美味しいよ」

俺は笑つて答える。

「えへへへへへへへへ」

なんだかなののはの顔が赤いように見えるのだが・・・気のせい
か?

「おこ」

ふいに後ろから声を掛けられて振り返ると恭也が立っていた。

「何か用か？」

俺は少し険しく訊いた。

「あー、その、なんといつか……だな

なにやら、恭也が言あぐねている。いつたいなんだ？

「こあいだは……すまなかつた！」

いきなり頭を下げて俺に謝罪する恭也。……え？ なに、この状況？

「あのあと、お前に言われたことをよく考えてみたんだ。お前の言うとおり、俺がしなければならぬことはあんなことじやなかつた。お前のおかげで目が覚めたよ。ありがとつ」

恭也・・・・・。

「別に、お礼なんていいよ。俺はただおせつかいを焼いただけだ。それに、お前が謝る相手はこいつちだろ？」

俺は親指でなのはを指した。

「ふえつー？」

いきなりふられてなのはは驚いた。

「・・・・・ああ、そうだな・・・・・」

恭也はなのはと向かい合つ。

「なのは……」めんな、お前もすく辛かつたのに、ずっとほつたらかしにして。ホントに、駄目な兄貴だったな……」

それは、恭也の心からの謝罪だつた。それを受けたなのはは・・・・・。

「ううん、そんなことないよ。お兄ちゃんだつてつらかったよね。なのはも氣づいてあげられなかつたから、お相子だよ」

なのはは、恭也を許した。そして自分も同罪だと言つた。

(やれやれ、やつぱり兄妹だな、この一人)

「なのは……」これからも、俺はお前のお兄ちゃんでいて・・・・・いいかな?」

「うん。なのはもお兄ちゃんの妹でいたい」

二人はお互いを許しあつた。それでもう、この一人はきっと大丈夫だ。

ひつしてなのはと恭也は、再び兄妹の絆を結び合つた。

第十一話 全快パーティー（後書き）

さて、次回からいよいよ無印編です。

けつこうかかってしまい、申し訳ありません。

こんな作者で恐縮ですがこれからもどうかよろしくお願いします。

感想、意見、いつでも受け付けます。

ではまた次回、お楽しみに。

無印編 第一話 原作の始まり（前書き）

ついに原作突入です。

はたして主人公は少女達を守り通せるのか。

ではお楽しみください。

あと、無印編のOPとED決めました。

無印編OP TERMINATED・境界線上のホライゾンOP

無印編ED I·11 Believe・灼眼のシャナ?ED

Side三人称

ドガツ！ガキツ！ゴガツ！

莊厳な雰囲気のある大理石の広間に衝突音が連續で響き渡る。その音を生んでいるのは広間を縦横無尽に駆け回り、飛び回る二つの影。神羅燎と彼の従者エヴァンジェリンだ。

彼らは今天道宮の大広間でこの二年間毎日続いている朝の模擬戦の真っ最中である。何度も何度も激突しては距離を取り、また激突する。それを繰り返し行っている。

ズガソツ！ドゴツ！バギンツ！

両者の激突は回を増すことに激しくなっていく。それだけではない。二人の拳が蹴りが合わさる度に衝撃波が生まれ広間に轟く。常人ではまず居留まる事すら不可能であろう。しかし、そんな状況で顔色一つ変えることなく一人の戦闘を見続ける者が一人。エヴァンジェリンと同じく燎の従者ヴィルヘルミナである。彼女はその場を一步も動かず、向かってくる衝撃波を全身に受けてもまるで何も感じていないと言わんばかりに平然とその場に留まり一人の模擬戦とは言い難い模擬戦を見つめる。

「はははっ、いいぞ燎！よくここまで強くなつたものだ！」

「あつたりまえだ！散々お前とヴィルヘルミナにじこかれたんだぞ、

強くならないわけが……ないだろ！――

エヴァンジエリンの賞賛に燎は笑つて答え、回し蹴りを放ち、エヴァを弾き飛ばす。

۱۰۷

エヴァは蹴りが当たる寸前で腕を交差させてガードした。そして空中で一回転し、着地した。

それを追つて燎も大理石の床に下りる。

「さあ、まだまだいくぞエヴァ！」

燎は構えをとり、全身に魔力を漲らせる。

「いいだろう。来るがいい！」

エヴァも受け立つ氣でいる。右手に断罪の剣を出した。

二人の体から溢れ出した魔力がぶつかり合い、せめぎ合っている。どう見ても模擬戦の域を逸脱していると思うのだが。

「はあつ！」

同時に床を蹴り、飛び出す両者。再度激突しようとした瞬間。

「アーマードアーム」

「アーマードアーム」

『試合終了』

アーマードアームが鳴り響き、ヴィルヘルミナとティアマターが模擬戦の終了を告げる。

「おひと

「おひと

二人は何とか寸前で急ブレーキをかけて止まった。

「おひと終わりか?」

「やれやれ、これからがいといこうだったのに

アームに乗りこなっていたところに試合を止められて不満げなエヴァア。

「燎様、そろそろ支度をしなければ学校に遅れるのであります

『早急準備』

「ああ、そうだな。じゃあ、俺は先に戻ってるから

ヴィルヘルミナとティアマターに囁かれて、家に転移しようとす

る燎。

「朝ご飯はすでに作つてあるのであります」

「ああ、ありがとうございます」

ヴィルヘルミナに礼を言い家に転移した。

「しかし、燎のやつ、この三年でまさかここまでものになるとはな」

燎を見送つてからエヴァがふいに感慨深げに言つた。

「ありがとうございます」

『同感』

ヴィルヘルミナとティアマトーも同意する。

「最初の頃は、私達に一撃すら当てられなかつたといつてな」

そう、燎はヴィルヘルミナとエヴァと一緒に修行をし始めた時は二人に全く歯が立たなかつたのだ。しかし今では、一人を同時に相手にしても引けを取らないどころか問題なく相手できてしまい、勝ててしまつぐらいの力量になつてゐる。凄まじいまでの才覚である。

「そういえば、もつそろそろか」

「？・・・ああ、原作でありますか？」

「ああ・・・・・」

二人は天井を見上げる。この世界に来てから三年、まもなくリリカルなのはの原作が始まるのだ。自分達の主にとつて、とても重要な時が。

「忙しくなるな

「でありますな

二人はしづらべじつとステンドグラスの張られた天井を見つめていた。

「ヴィルヘルミナ」

「？」

ふいに呼びかけられて、ヴィルヘルミナはエヴァに目を向ける。

エヴァもヴィルヘルミナに目を向けた。

「何があるうと・・・・必ず燎を守り抜くぞ」

その目はその覚悟を映し出したかの様に燐然と輝いていた。

「・・・・・無論であります

『絶対守護』

ヴィルヘルミナもまた覚悟を映した目でエヴァを見据え、ティマ

トーは覚悟を込めた声で答えた。

一人の従者は改めて決意の炎を己の魂に宿した。

Side 燐

朝の修行を終えて天道宮から戻った俺はヴィルヘルミナの作つておいてくれた朝ご飯を食べて制服に着替えた。もちろん私立聖祥大附属小学校の制服だ。着替えを終えてランドセルを背負い玄関で靴を履き、扉を開ける。

「いってきまーす！」

俺は勢いよく家を飛び出した。そのままバス停まで走る。

バス停に着いてしばらく待つて「一・三分ぐらいしてバスが来て乗つた。

「あー、燎くん、おはよー」

「おはよう、燎くん」

「燎、いってきまーす！」

この二年間で聞き慣れた声が俺を呼ぶ。一番後ろを見てみると

く見知つた三人が居た。

そこにいたのは「存知聖祥の三人娘、俺の幼馴染の高町なのは、クラスメートで友達の月村すずか、同じくクラスメートで友達のアリサ・バーニングス。

「おひ、おはよ」

俺は挨拶をして三人が座っている場所に向かつた。

さあ、いよいよ物語の幕が開く。必ず全ての悲しい運命を変えてみせる。

さあ、原作が始まりました。

これからどうなつていいくのか、主人公はどうのよつて物語を変えていくのか。

楽しんでいただければと思います。

では今回はこの辺で。

また次回をお楽しみに。

無印編 第1話 朝の会話・自分の将来（前書き）

突然ですが畠山さん、子供のころの夢つて何でしたか？

ちなみに私はサッカー選手でした。

と言つてもなりたいではなく、なればいいなという感じでした
が。

畠山さんはどうでしたか？

私は残念ながら断念してしまいましたが、いまこうして小説を書いて沢山の人に読んでもらっているのはとても楽しいです。

まあ、この話は「れぐら」にして・・・

では、無印編第一話始まります。

Sideのは

もう三年越しの片思いです。でも、未だに燎くんは気付いてくれません。もうつ、燎くん鈍すぎなのつー···まあ、それはそれで、今ではすずかちゃんとアリサちゃん、一人も友達ができる、毎日がとっても楽しいです。ところで今日、なんだか変な夢を見ました。真っ黒い怪物に男の子が襲われている夢です。それに夢にしてはなんだか妙にリアルでした。でも、ただの夢だと思つて気にしないことにしました。

このとき、わたしはまだ知りませんでした。この夢がわたしの人生を大きく変える始まりであることを。

（今日の夢・・・ユーノだつたな。じゃあ、今夜あたりが原作開始つてことになるのか。帰つたら一人にも伝えとかなきやな）

俺はヴィルヘルミナの作つてくれたミニハンバーグを口に入れながら、今日見た夢について考えていた。あれがユーノなら、間違いなく今夜、なのはがユーノと出会い、魔法少女になる。色々と準備しておかなきやな。

「・・・・よつ・・・・つよつ・・・・・・燎つてばー。」

「ん？」

いきなり名前を呼ばれたので俺は横を向いた。アリサがこっちを見ていた。

「なんだよ、アリサ？」

「なんだよじやないわよ。わざわざから呼んでるのに全然返事しないんだから」

どうやらかなつ考え込んでいたらしい。

「ああ、悪いな。ちょっとボーッとした

俺は素直に謝つた。

「どうかしたの燎くん？」

今度はすずかが聞いて来た。

「なんでもなによすすか。ひょっとな・・・

俺はやつて口説魔化した。

「・・・・・・・・・・・・

「・・・・・? なのは?」

「ふえひーー。」

せつときからやつて黙りっぱなしだったなのは口説を掛けてみた。なのはは俺の声に反応して驚いたようになつて向いた。

「な、なに燎くん? ビリカした?」

慌ててこらなのはは少し可憐こと細つたのは内緒だ。

「いや、お前やつてから黙りこへつたままだから
「え? そ、やつだったかな? こまははは

俺の言葉に苦笑するなのは。

「やつしたんだ?」

俺はなのはに訊いてみた。

「うそ・・・・・あのお、やつての授業で先生が言つてた将来のこと
を考えてたんだ」

「将来？」

鸚鵡返しに訊く。

「うふ・・・・・」

将来、将来ねえ。昼飯食つてゐときも考へるよつな」とでもない
と思うんだが。

「アリサちゃんとすずかちゃんと燎くんはもう大体決まつてゐんだ
よね？」

そつなのはが訊いてくる。なにか参考になるものがないか期待し
てるのだろうか？

「でも、全然漠然とよ。将来パパの後を継げればいいかなあつてぐ
らいだし」

「わたしは機械とか好きだから、工学系にすすめればなあつて思つ
てるだけだし」

アリサとすずかがなのはの問い合わせに答える。いや・・・・・アリ
サ、すずか、それも小学三年生が考へるものとしては、どうなんだ
うう。

「そつかあ、燎くんは？」

今度は俺に振つてくる。

「俺か？俺は・・・・・・・・・別にないな」

ズルツ！

・・・・? なにやら横を向いてみるとなのはたちが椅子から滑り落ちそうになつてゐる。どうかしたのか?

「あ、あんたねえ、ちよつとは眞面目に考へなきこよ。」

と、アリサが吠えてくる。結構眞面目に答えたつもりなんだが。

「あはは、で、でも燎くんりじこかも」

すずかが苦笑しながら言つてゐる。つていつかすずかよ、俺らしひつてなんだ?

「そつか、燎くんはまだなんだ」

なのははすこじ残念そつだ。どうやら期待してたものは得られなかつたようだ。

「ま、そんなに焦つて考へることもないだろ。俺たちはまだ小学三年生なんだ。考へる時間なんてまだまだあるよ」

俺はなのはを元氣づかるために言つ。

「・・・・・うん、そうだよな

そう言つたなのはの表情は少しだけ明るくなつていた。

「でもや、なのはは喫茶翠屋の一代田じゃないの?」

ふいにアリサが言つてきた。

「うん、それも将来のヴィジョンの一つではあるんだけど……」
やう言つてのは少し俯く。

「やりたことがあるような気はしてるんだ。でも、それがなんなのかわからぬつて感じで。それにわたし……あんまりひとりで慢できるようなところもなーし……」

「そう言ひながらどんどん暗い顔になつてこくなのは……つたぐ、ホントにこいつは……」

「バカチン！？」

ベチッ！

「うわーー？」

こきなつアリサがなのはにレモンを投げつけた。レモンは見事になのはの頬に貼り付く。

「自分のこと簡単にそんなん言つてさじやなーのーー！」

アリサは自分を簡単に卑下したなのはに對して本氣で怒っていた。
まあ、気持ちは分かる。アリサがレモンを投げつけなきや、俺がこの馬鹿にテロップをかましていた。

「やうだよ。なのはちやんにしかできなーじと、やつとあるよ

すすかも同意していく。「の二人、性格は真逆だが、友達思いなところは一緒なのだ。類は友を呼ぶとは」の「とか。

「だいたいあんたねえ、理系の成績はこのあたしよりも良いじゃないのー。それで自慢できるものがないとか、どの口で言つかあー」「

アリサがなのはの頬を抓る。思いつきり抓る。なのはの頬がまるで餅のように伸びる伸びる。

「だ、だってなのは、文系苦手だし、体育も苦手だしね（泣）」

涙声でなのはが言つ。その状態でまともに言えるとは器用な奴。

「あ、ああ、り、燎くん……」

すずかが困った感じで俺を見る。何とかして欲しいようだ。やれやれ、しかたがないな。

「おー、アリサ。その辺で許してやれよ。なのはも反省しただろうし」

俺がそう言つとアリサは俺を一瞥してなのはの頬から手を離した。

「まあ、いいわ。このぐらいで勘弁してあげる」

「あひひ~、燎くん、あつがとおなの」

なのはは真っ赤になつた頬をさすりながらお礼を言つてくれる。

「ま、あれだ。そんなに深く考える必要もないさ。別にやりたいことがなくても、将来素敵な相手を見つけて結婚して、幸せな家庭を作るってのも立派な夢だと思つぜ俺は」

「素敵な・・・・」

「相手と」

「結婚」

何故か俺のほうを見ながら三人娘の顔が赤くなつていく。

「…………? どうかしたか?」

俺は不思議に思つて訊いてみた。

「ベニス」

「なんでもないわよっ！」

と、三人は顔を赤くしたまま俺から顔を逸らした。なんなんだ、いつたい？

「ねえ、ねえ」

ん?
」

ふいにアリサが口を開く。

「あ、あんたはや、将来そんなふうに過ぎ」せたらいいなって……
思うの?」

「ハルの言葉？」

そんなことを尋ねるアリサ。

「あ？ まあそりやあな、そりできたらいいなつて思つけど、」

と、俺は正直に答える。

「そっか、燎くんはそういうのがいいんだ。だったらわたしも・・・」

なんだろう、なんだか三人が恐い。いつたいどうしたというのだらう?

（なあ、アラストールよお・・・・）

(じゅな、マルコシアス)

((. はあ))

二機のデバイスは人知れずため息をついていたとか。

わい、今日のところはいいままで。

お楽しみいただけたでしょうか？

ではまた次回お会いしましょう。

最近寒くなつてきました。風邪などひかないようつぶやくの週1回でした
わい。

それでは。

無印編 第二話 原作介入開始（前書き）

はい更新です。実は私少しばかり風邪を引いてしまいました。

といつても大したことないんです。咳がと鼻が出るだけですか
ら。

やつぱり、この季節は風邪を引きやすくなるんですね。皆さんも
十分に注意してください。

それでは無印編第三話始まります。

Side 燐

学校が終わって放課後、俺たちは雑談をしながら家路についていた。

「はあ～あ、今日の授業も退屈だつたな～」

俺は伸びをしながらぼやく。

「へやは、燎くん今日もほとんどの授業寝てたもんね」

俺の隣を歩いているなのはが苦笑している。

「まつたく、なんでそれでいつもテストじゃいい点取れるのかしら

アリサはなんだか納得いかないといった感じだ。・・・って言つてもな。俺の頭は二十歳の大学生なわけだし、小学校の勉強くらい簡単に解けなきやみつともないだる。

「でも、体育の時間、いつも通り活躍してたよね？」

と、今度はすずかが言つてくる。

「それはすずかもだ。お前ホントに見かけによらず運動神経良いよな。どつかの誰かさんとは大違ひだ」

そう、すずかは本当に見た田に反して運動が得意なのだ。これも夜の一族の血の影響なんだろうか。

「ねえ燎くん、そのどつかの誰かをなんて誰のことなのかな？かな？」

なのはがジト田で俺を睨んでくる。しかも軽くひぐらし化して申し…。

「さあ、誰のことかな？」

俺は口笛を吹いて田を逸りす。

「むへへ。・・・・・あ、そうだ燎くん。お母さんがねよかつたらまたお店の手伝いして欲しいって言つてたよ」

「・・・・・え？」

なのほの言葉に俺は固まってしまった。

「・・・・・手伝い？」

「うん・・・・・」

「それってまた、あの服着て？」

「やう・・・・・かも？」

俺の脳に詰まわしい記憶がフラッシュバックする。あの悪夢がまた…。

「なんで、男の俺があんな服着なくちゃいけないんだよ」

俺は脱力しながら愚痴る。

「にゃははは、でも似合つてたよ。燎くんのメイド服

なのはが笑顔で言う。

ちなみにエヴァとヴィルヘルミナがメイド姿の俺を見たら鼻血が噴水のように吹き出てとてもいい笑顔で気絶した。

「なのは、桃子さんに言つといってくれ。女装なしなりふを取けるつて」

俺はなのはに桃子さんに伝言を伝えるよりに言つ。

「うん、わかったの。お母さんには聞いておくね」

なのはは了承してくれた。俺は胸を撫で下す。ふう、これで女装させられる心配はなくなつたな。

その後俺たちは雑談を続けながら歩いた。やがて雑木林のところを通り掛かる。すると・・・。

(たすけて・・・・・)

「ん?」

「え? ?」

(今の話は・・・・)

聞いえてきた念話に俺は耳を澄ませる。

(おねがい・・・・だれか・・・・)

「え? なに?」

ふいになのはが立ち止まる。・・・・やはりなのはこも聞いえたか。

「なのは?」

「なのはちやん?」

アリサとすずかも止まって振り返り、なのはを見る。

「じつした? なのは?」

俺はなのはに尋ねる。まあ、分かってるんだけどな。

「あの、燎くん。今、声が聞こえなかつた？」

「声？」

・・・・・やつぱりか。

「声ね。アリサとずすかは何か聞いたか？」

俺は後ろを振り向いて一人に尋ねた。

「うん」

「わたしたちはなにも・・・・

一人は首を横に振つて否定する。

「でも、今確かに・・・・

（おねがい・・・・たすけて・・・・・）

「…やつぱり聞こえた。・・・・うつうー」

ダダツ！

いきなりなのはは走り出し雑木林の中に入つていつた。

「ちょ、なのは！？ビーフしたのよ！？」

「なのはちやん！？」

ダダダツー！

アリサとすずかもなのはを追つて雜木林に入つていった。俺も二人の後を追う。

なのはの後を追つて雜木林の奥に行つてみると、なのはがしゃがみ込んでいた。手に何かを抱えている。

「なのはー！」

「なのはー！」

「なのはちやん！」

なのはは俺たちの声に反応してひきあひを振り向く。

「燎くん、アリサちやん、すずかちやん……この子……」

なのはは手に抱えていたものを見せる。

それは首に赤い宝石のついた首輪を付けたフエレットだった。・・・

・・・聞違いない。コーノだ。

「ちよ、どうしたのよ？ その子へ！」

「怪我してゐみたい」

二人は突然のことに対応できず慌ててくる。

「なのは、そのフフレットは？」

俺はなのはに事情を訊いた。

「あ、あのね、わたし、なにか声が聞こえたような気がして、来てみたらこの子が倒れてて……」

なのはは狼狽えながらも説明した。

「そうか……わかった。とりあえず、病院に連れて行こう。アリサ、確かに近くに動物病院があつたよな？」

俺はアリサに尋ねる。

「え？ ……う、うん。あるわよ」

アリサは戸惑いながら答えた。

「案内してくれ。このままだとヤバイことになる」

俺は真剣さをだしながらアリサに頼む。

「わ、わかったわ。こっちよ

アリサは走り出した。そのあとを追つて俺たちはコーノを連れて動物病院に向かった。

アリサの案内に従つて俺たちは動物病院に辿り着き、コーカーを先生に診てもらつた。

「先生、どうですか？ その子の容体は？」

なのはが不安そうに先生に尋ねる。

「大丈夫。 そんなに大した怪我じゃないから、少し休めばすぐによくなるわ」

先生は安心させるように言つた。 その言葉になのはたちはホッとする。

「あの、先生、この子……フューレットですよね？」

ふいにすずかが先生にそんなことを訊く。

「フューレット……のかしら？ 知らない種だけど……」

先生もよく分からないと言つた感じだ。 ま、無理もないかもな……

「まあどうあえず、この子のことは私に任せてあなた達は今日はもう帰りなさい。 あんまり遅くなると家の人が心配するわよ」

先生が俺たちに帰宅を促す。

「はい、お願ひします。・・・・あれ？」

なのはがベッドで寝ているゴーーを見た。

「なのは？」

「なのはちやん？」

「どうしたのよ？」

俺たちも同じよひにゴーーを見る。

「あ、このナ・・・」

「田を覚ましたみたい」

ゴーーは震えながらも起き上がるが、力が入らないのか
うまくいかないらしい。

「これなら大丈夫そうね」

先生がフュレットの様子を見て言つた。

「はい・・・・？」

（なのは？・・・・・・・・）

なのはを見てる。どうやらなのはの魔力資質に気づいたようだな。
なのはが手を伸ばすとフュレットは匂いを嗅いだ後なのはの指の先

を軽く舐めた。・・・・ほほ、初対面の女の指を舐めるとは、噂に違わぬ淫獣ぶりだなユーノ。

なのはの指を舐めた後ユーノはまた気を失った。俺たちはユーノを先生に任せて家に帰った。

あれから時間が経つて8時を回ったころ。ベッドの上で本を読んでいると、なのはからメールがきた。どうやら、ユーノを預かる許可を得られたようだ。俺はよかったです、と返信した。

さて、あとはユーノからまた念話が来るのを待つだけか・・・・・。俺はベッドに横になりそれまで寝ておこうと目を瞑った。

(聞こえますか?・・・・僕の声が・・・・聞こえますか?)

・・・・・来たな。

(お願いです・・・・僕の声が聞こえた方・・・・僕のところまで来て下さい・・・・力を貸して欲しいんです。どうか・・・・お願
い・・・・)

・・・・ふう、やれやれ、仕方がない。行くとするか。

俺は起き上がりベッドから降りて部屋を出た。階段を下りて玄関に向かうとそこにはすでにヴィルヘルミナとエヴァがいた。どうやら一人にも念話が届いていたようだ。

「一人とも・・・・・聞いたな？」

俺は一応の確認を取る。

「はいあります

『傍受』

「ああ

一人は真剣な表情で答える。

「そうか・・・・

俺は一人の眼を見る。その眼には一片の迷いも見られない。

『・・・・・来たのだな・・・・・この時が・・・・・』

アラストールが重く言つ。

「ああ

俺は答える。

『ついで……始まんだな……』

マルコシマスが尋ねる。『うーん』

「あ

俺はもう一度答える。

「……………行くか

俺は共に戦うパートナー達に決意と覚悟を込めて言つ。

『うむ

『うむ

「（ ドクチ ）

『御意

「あ

仲間たちはそれぞれに同じく決意と覚悟を込めて答える。

「よし……行け……」

俺は扉を開けて外に出る。後には、ヴィルヘルミナとエヴァが続く。

俺は外に出ると、魔力で身体強化し、屋根に上がる。ヴィルヘルミナとエヴァも俺に続いて屋根に上がる。屋根に上がると俺は手を

上にかざし、言葉を紡ぐ。己の力を呼び起す言靈を。

「燃え立つ空より来たりて！」

正しき決意を胸に！

我は運命^{さだめ}を変える剣を執る！

汝、罪を裁きし断罪の劫火！！

アラストール！・・・セットアップ！！

『承知！セットアップ！！』

俺の全身を炎のような紅蓮の魔力光が包み込み、バリアジャケットを形成する。

形成し終わると俺を包んでいた魔力光が弾けて散った。そこにはバリアジャケットを着た俺がいた。

俺のバリアジャケットはアニメ第1話でシャナが登場したときに着ていた服の上に夜笠を着たものだ。腰には鞘に入った刀を差している。長さはBLEACHの一護の天鎖斬月と同じくらいだ。この体には少し大きいが問題ない。

俺は準備をし終えて、一人と一緒に夜の町を飛んだ。目指すはコノと恐らくなのはもいる動物病院。

俺たちが家を出て数分、動物病院が見えてきた。しかしそこは無

残な大穴が空けられていた。その病院だけでなく、周りの塀や電柱にも鱗や大きな傷跡がついていた。

俺はこの惨状を作った元凶を探す。・・・見つけた！そこには黒く禍々しい姿をしたジュークエルシードの思念体がいた。

・・・ん？ あれは、なのはか。

思念体のすぐ近くにユーノを抱えて逃げ回っているなのはがいた。思念体は体から触手のようなものを出してなのはを追い立てる。なのははかろうじて思念体の攻撃を躱しているが、運動神経が切れるなのはでは長くは持たないだろう。そして俺の予感は的中する。なのはは思念体が碎いた塀の瓦礫に足を取られて転んだ。思念体はその隙を逃さずなのはを捕えようと触手を放つ。

（なのはっ！）

俺は炎髪灼眼を顕現させ虚空瞬動を使い一瞬のうちになのはと思念体の間に割つて入り腰に差した刀を抜き思念体の放った触手を一本残さず切り落とした。

シューシュン！・・・・・ボト、ボト、ボト。

「ふえっ！？」

なのはは可愛らしい声をあげる。

「よつ、なのは。じんばんわだな」

俺はなんとも場にそぐわない挨拶をする。

「燎……くん……？」

なのはは信じられないものを見たような目で俺を見た。

「ああ、そうだよ。俺だ」

「な、なんで燎くんがここに……それにその恰好は……？」

なのはは混乱してゐるのかイマイチ状況を呑み込めていないので、無理もないがな。

「まあとつあえず、話は後だ。まずは……」

「えつ？」

俺は目の前の思念体に目を向ける。思念体は邪魔されたことを怒つてゐるのか異様な呻き声を出して俺を威嚇する。

「そこ」のへドロみたいなでかぶつを片付けないとな

俺は刀の切つ先を思念体に向ける。

「りょ……燎くん……」

弱々しい声を聴いて振り向くとなのはが揺れる瞳で俺を見ている。

「大丈夫……なのはは……俺が護る」

なのはの目を見て迷うことなく決意を込めて宣言する。

「ひえっ！？」

なんだかなののはの顔が赤いような・・・・・気のせいいか?

俺は再度思念体に目を向けた。
そして声に怒りを滲ませて言う。

「おー、ヘドロ野郎。よくも俺の友達に手を出したな。お前に言葉を理解するだけの知能があるとは思わないが、言つておいてやる」

炎髪と灼眼がさらに輝きを増していく俺の怒りに呼応するかのように。

「お前は・・・震えたことがあるか？」

その身を切り裂き、魂さえも凍てつかせる

死の恐怖を感じたことがあるか？」

俺は燃える火眼で眼前の敵を見据え、覚悟の言葉を口に放つ。

「震えよーーーー震れと共に跑けーーーー」

炎髪灼眼の討ち手が修羅の巷に降り立つた。

どうでしょうか。今回は中々の自信作です。

アラストールのセットアップの詠唱はテモンベインからとつてみました。

燎の決め台詞は聖痕のクエイサーからです。

では次回もお楽しみに。

感想、意見、どんなビビ送つてください。

お待ちしております。

無印編 第四話 魔法少女誕生（前書き）

もうすぐ冬に入りますね。ますます寒くなつてきますが体調の管理などお気をつけください。

私のほうは熱は一晩寝たらすっかり下がりました。

まあ、まだ咳と鼻が出るのですが・・・。

皆さんも体を大事にしてくださいね。

では、無印編第四話始まります。

Sideなのは

高町なのはです。私は今日、放課後、燎くんとアリサちゃん、すずかちゃん、いつも三人と一緒に帰る途中、不思議な声を聞きました。耳に聞こえると言つより、頭に直接響くような声でした。その声は、助けを求めていました。私はその声が聞こえたほうに走つていきました。雑木林を進んで少し開けたところにつくとそこに首に紅い宝石をつけたフェレットさんが倒れていました。

私を呼んだのは、この子……？

私達は急いでそのフェレットさんを動物病院に運びました。そのあとフェレットさんを誰の家で預かるかを相談しました。アリサちゃんのところは犬をたくさん飼つてゐるし、すずかちゃんの家は猫さんがいるし、そななるとなると燎くんの家ということになるのですが、私は夕飯を食べているときに皆にフェレットさんのこと話をしました。私の家は喫茶店ですからちょっと心配でしたが、お父さんたちはOKをしてくれました。私はそのことを燎くんたちにメールで伝えて寝ようとして目を瞑りました。しかし……。

(聞こえますか？・・・僕の声が・・・聞こえますか？
?)

「ふえつー？」

これってフェレットさんを見つけたときに聞こえた声？

私は集中して聞こえる声に耳を傾けました。

（お願いです……僕の声が聞こえた方……僕のところまで来て下さい。……力を貸して欲しいんです。どうか……お願
い……）

「あ……ちよつと……」

その声は聞こえなくなりました。これってやっぱりあのフェレットさんが……？わからないけど放つておけない。私は服を着替えてお父さん達に気づかれないように家を出ました。そのまま病院まで走りました。そしてようやく、病院のところまでくるとなんだか周りの雰囲気が変わったような気がしました。人気がなくなつて少し不気味な感じです。なんだか怖くなつて引き返そうと思いましたが、なんとか勇気を出して病院に入ろうとしたら、私の視界にあのフェレットさんが走っていくのが見えました。

「あつ、あれは……」

私はフェレットさんに駆け寄ろうとしましたがそれより先に黒い大きな影が現れてフェレットさんに襲い掛かりました。フェレットさんは間一髪で上に飛んで黒い影の攻撃をかわしました。そしてそのまま私のところに飛び込んできました。私はなんとかフェレットさんをキャッチしました。

「な、なにに？いつたいなに！？」

私は状況がわからず混乱してしまいました。不思議な声に呼ばれたと思つたらいきなり変な影がフェレットさんを襲つてゐし、いつ

たいなにがどうなつてゐるの〜！？

「きて・・・・くれたの・・・・?」

え？ 今のつて

私はアリレッティさんを見ました。

—あ・・・・・ありがとう・・・・・

• • • • • • • •

上卷

私は驚いてフロレットさんを落としそうになりました。
なんで、フロレットさんが喋ってるの？

あの・・・あなたは、いやたい・・・ご!!」

私がフェレットさんに聞こうとしたらあの大きな影がこっちに向かつてきました。私はなんとかその影をかわしました。

「そ、その・・・なにかなんだかよく分からなしけど、い、いたしな
んなの？何が起きてるの？」

私はFHレットさんに何が起きてるのか訊きました。こんなのがう考へてもおかしいです。

「君には・・・資質がある。お願ひ・・・僕に少しだけ力を貸して」

私の腕の中でフューレットさんが言つてきました。

「資質？」

なんのことだらう・・・・?

「僕は、ある探し物のために、此処とは違う世界から来ました
違う世界？ますますわからないよ。

「でも、僕一人の力では想いを遂げられないかもしねない・・・
だから、迷惑だと分かっているんですけど・・・資質を持った人に協
力して欲しくて・・・」

それでわたしを呼んだの・・・?

「お礼はします。必ずします。僕の持っている力をあなたに使って
欲しいんです。僕の力を・・・魔法の力を！！」

「魔法・・・？」

魔法つて・・・そんなものがほんとに・・・?

「グルルルアアアアアアアアーー！」

「ーー！」

いつの間にか黒い影はすぐ近くまで迫っていました。影は体から
触手のようなものをして私を捕まえようとしました。私はそれを
かわしながら逃げましたが、転がっていた瓦礫に足を取られて転ん

でしました。

「あひひ」

当然黒い影の怪物は私が転んだのを見逃さずまた私を捕まえるために触手を伸ばしました。

（助けて・・・燎くんつ・・・）

私は心中でずっと思い続けている男の子の名前を呼びました。昔私が泣いていたとき、私を抱きしめて大切なことを教えてくれた男の子。初めて私の友達になつてくれた女の子のよつた綺麗な顔をした男の子。私の大好きな男の子の名前を。

怪物の触手が迫ってきます。私は田を瞑りました。・・・しかしいつまでたつてもなにも起いません。私は不思議に思つてつづらと田を開けました。そこには・・・・・。

「ふえつーー?」

私は思わず変な声を上げてしましました。なぜなら田には・・・・・。

「よひ、なのは。」んばんわだな

「燎……くん……？」

まるで燃えているような綺麗な紅い髪と瞳をした私の好きな男の子、燎くんが立っていたからです。

（な、なんで燎くんが……？それに、その髪と眼……）

私は混乱していました。怪物に襲われそうになつたら、髪と瞳が紅くなつた燎くんが助けに来てくれるなんて、夢にも思いませんでした。でも、こんなときにおかしいですけど、燎くんの燃えているような紅い髪と瞳は暗い夜の中、より強く輝いていて、とても……とても……。

（綺麗……）

私は今の燎くんの姿に見蕩れてしましました。燎くんは手に持つた刀を怪物に向けたままこいつを見て微笑みながら言いました。

「大丈夫……なのはは……俺が護る」

その言葉を聞いて私は自分の顔が熱くなるのが分かりました。りよ……燎くん／＼。

そして燎くんは、怪物のほうに目を戻して強く言いました。

「震えよ……畏れと共に跪け！……！」

そう言つたときの燎くんは、すつじく格好よかったです。

Side燎

さて、なんとか間に合つたわけだな。後はこのヘドロ野郎を片付ければ良いだけだ。よーし・・・とその前に・・・。

(おお前ら、手を出すなよ。こいつは俺となのほどなんとかする。二人は待機してくれ)

俺は近くの家の屋根にいるエヴァとヴィルヘルミナに念話を飛ばす。

(了解であります)

(ふん、すこしつまらんが・・・まあ、いいだらう。お前の力、見せてやるがいい)

一人の了解が取れたところで、俺は両手で剣を正眼に構える。

「あ・・・あの」

「ん・・・?」

呼びかけられて振り向くとユーノがなのはの腕の中で俺を見ていた。

「あなたは・・・魔導師・・・なんですか?」

「ユーノはそう質問してきた。まあ、気になるだろうな。この世界は管理外世界だし魔力資質の持ち主は滅多にいないからな。

「ああ・・・・一応な」

俺は無難な答えを返す。

「それよりも、おにフューレット、あれは一体なんだ?」

俺はユーノに思念体のことを訊く。ホントは知ってるんだけどな・・・。

「あれは、ジュエルシードが暴走した思念体です」

ユーノは俺の問いに真剣に答えた。

「ジュエルシードって・・・・ロストロギアじゃないか。なんでそんなものがここに?」

俺は再度聞く。・・・・知ってるけど。

「それは・・・・つーあぶない!」

ユーノが叫ぶ。思念体が痺れを切らして襲い掛かってきたのだ。だが・・・・

「遅い!-!」

俺は思念体の強襲を見切り、すれ違いざまに刀を横一線に薙ぐ。

「ギュアアアアアアーーーー！」

思念体はすさまじい叫び声をあげる。

「す・・・すゞーーー！」

ユーノは俺の力量を見て感嘆の息をもらす。

「おいつレットーなにか手があるならはやくやれーここは俺が
抑えておいてやるーーー！」

俺はユーノに向かつて叫ぶ。

「は、はいっー！」

ユーノの返事を聞いて、俺は再び思念体と向き合ひ。それで、こ
っからが本番だ。

俺は刀を構えて思念体に向かつて走り出した

Sideなのは

燎くんが怪物と戦っています。でも私はただ見てるだけです。な
んだかすごく悔しいです。私にも力があれば燎くんと一緒に戦える
のに。力が・・・・欲しい。燎くんと一緒に戦える力が・・・・燎
くんを助けられる力が・・・・欲しいよ。

「あのひ

「えつ？」

フュレットさんに呼ばれて私はフュレットさんを見た。フュレットさんは首についでいる紅い宝石を口にくわえて私に差し出した。

「これを

「これは・・・?

私は宝石を手にとった。

「それは『デバイス』といって、魔法を使うための道具のようなもので
す」

「デバイス」

「それを使えば、あなたの中に眠っている力を目覚めさせることができます」

「眠っている・・・力?私に・・・そんなものが?」

「はい」

フュレットさんは迷わず頷いた。私にも力がある。なら・・・
燎くんの力になれるかもしねー!

「フュレットさんー使い方を教えて!私、燎くんを助けたいー!」

そう言つたとき、私の心に迷いはありませんでした。初めてあつたとき、私を暗闇から救つてくれた燎くん。大切なことをたくさん教えてくれた燎くん。燎くんのおかげで私は家族とも向き合えましたし、アリサちゃんやすずかちゃんとも友達になれた。だからもし、燎くんが困つていたら、苦しんでいたら今度は私が燎くんを助ける。ずっとそう思つていました。だから・・・・・。

「私は戦う。私の力で燎くんを・・・大切な人たちを護れるなら。私は・・・・戦う！！！」

キイイイイイイイイン！！！

「これは・・・・・」

手が暖かくなつていへを感じて見ると、私の手にある宝石
が輝いていまいした。

「デバイスが・・・・あなたを主に選んだ・・・」

「え？」

「いいですか？これから僕が言うことに続いて言って下さい」

一
「う
ん」

いきますよ。・・・我、使命を受けし者なり

「我、使命を受けし者なり」

私はフェレットさんに言われたとおり続いて言葉を紡ぐ。それはまるで呪文のような言葉。

「契約の下、その力を解き放て」

「契約の下、その力を解き放て」

「風は空に、星は天に」

「風は空に、星は天に」

その呪文を紡ぐたびに私の中にある心臓じやない何かが激しく脈打つのが分かる。

「そして、不屈の心は・・・」

「そして、不屈の心は・・・」

最後の呪文を紡ぐ。鼓動が最大にまで高まる。

「「「」」の胸に！――！」

「クンッ――！」

「「「」」の手に魔法を！――！」

私は腕を上げデバイスを高く翳した。そしてこれから一緒に戦つていく私の相棒の名前を呼んだ。

「レイジングハート・・・セットアップ！！」

『スタンバイレディ・・・セットアップ！！』

レイジングハートの声が聞こえて桜色の光が私の体を包み込んだ。

Side燎

思念体と戦つていると、後ろから凄まじい魔力を感じて振り返ると桜色の閃光が天を衝かんばかりに伸び上がっていた。その光景はどこか神秘的なものを感じさせるものだった。

「魔法少女の誕生だな」

俺はそんなことを呟いた。

今、少女の物語は幕を上げた。

いかがでしたでしょうか。ついになのはが魔法少女として覚醒しました。

さて、今回は皆さんにお願いがあります。

燎の使うオリジナル魔法・技のですが、なにかいものが思い浮かんだなら是非とも送つていただければいいなと思います。もちろん私のほうでも考えていますが一人だとやはり限界があるので、できたら協力していただけるとありがたいです。

ほかにも感想・意見・誤字脱字の指摘等、どんどん送つてください。お待ちしております。

それではまた次回をお楽しみに。

ご協力お願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4122x/>

魔法少女リリカルなのは～運命を変えし転生者～

2011年11月21日17時42分発行